ふじもの



4

東京農大畜友会



東京農業大学畜友会

近代養鶏の専門誌、斯界最高の執筆陣！
第１線指導者，専業・集団養鶏家の技術と経営の指針
《毎月15日発売》

鶏の研究

1部　100円(送料18円)
6カ月　550円(〃　共)
1カ年　1100円(〃　共)

■最新の研究・試験・調査，経営記事
■海外養鶏の的確なるキャッチ
■科学研究と実地との結合

●養鶏関係、器具・器材・機械・薬品・添加剤
●関連図書・海外養鶏書籍・雑誌
●床面給温式ブロイラー鶏舎・育雛舎の設計・施工

鈴木健三著
定価３００円
(送料５０円)

新しい飼料添加剤

見本誌呈

東京都千代田区丸ビル６２３
株式会社 鶏の研究所
電話（201）3589・4704　振替東京73,261

C. R, D. ロイコチトゾーンの対策に
抗病力を増強させ　ヒナを丈夫に育てる

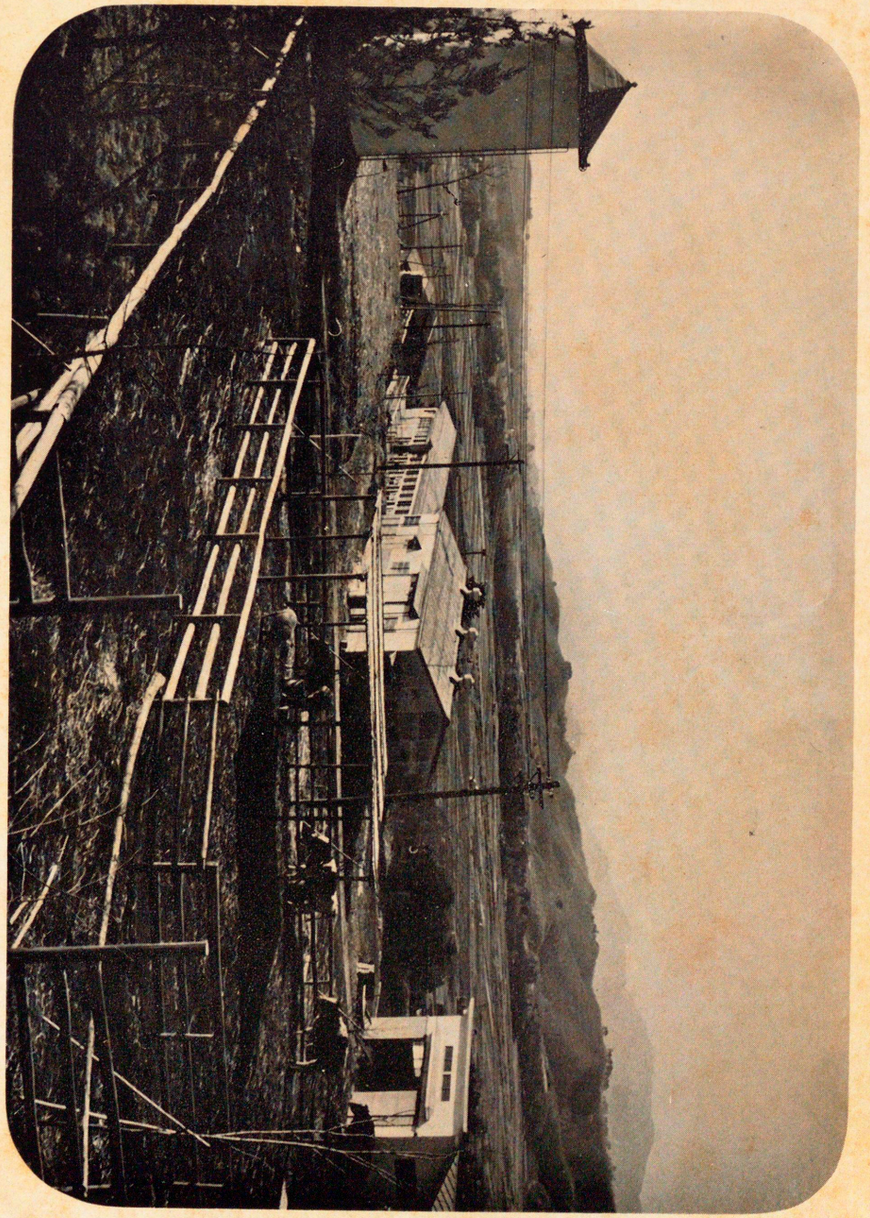
ニトロフラン誘導体製剤

ハイフラン

〔効能〕 ヒナの成長促進・抗病力の増強
産卵率の向上・飼料要求率の向上
下痢の治療と予防・ロイコチトゾーン病の抑制

〔包装〕 1kg(20g×50袋)　5kg(100g×50袋)
20kg(1kg×20袋)25kg

製造発売元
タイガー製薬株式会社　東京都世田谷区上馬町1－435
仙台・東京・静岡・岡山・熊本・札幌・北見・釧路



ふじみの 第四号 目次

表紙　畜産学科二年　中村孝

巻頭言……畜友会委員長　杉本健之（1）
新春を迎えて朗報二つ……畜産学科科長　平林忠（2）
マトンとブロイラー……日配KK取締役研究場長　西川哲三郎（3）
農場実習に対する学生の要望について……石原太衛門（4）

＝特集＝　畜産政策の見方

◆畜産行政の見方……東北農試畜産部　佐々木泰斗（9）
◆養鶏業者の見方……丸岐孵卵場　椎野志郎（12）
◆学生の見方……学生　中里憲司郎（13）
夏期実習……畜産三年　谷本克則（15）
共同経営……畜産三年　坂井忠衛（17）
酪農の内幕……畜産三年　角田幸雄（19）
農業志望……畜産二年　西野正子（20）
ブラジルに発つ男……畜産四年　沢畑誠（22）
未来の人間性……（三十九年度卒）　小野竹一（27）
牛乳の風味……講師　山下良志（29）
友への雑文……講師　伊藤澄麿（30）
何かが欠けている……助教授　戸健司（31）
離島の悩み……講師　田中一栄（32）
駆けだし……助手　近江弘明（33）
インド古代美術を鑑て……畜産三年　田中牧生（34）
農村に於ける恋愛と結婚……畜産四年　栗原良雄（37）
英語雑感……畜産四年　町田尚（40）
進む……畜産三年　大賀四郎（42）
母との話し……畜産三年　遠矢東明（43）
夕暮れ……畜産三年　宮洋一（44）
幼ない頃の思い出……畜産二年　源田寛（45）
愚者のたわごと……畜産二年　はやしかずみ（47）
人間性を求めて……畜産三年　苗代信一（48）
テレビと農村子の自由……畜産三年　小野賢二（51）
農業の変遷と近代化……畜産三年　梅田考文（52）
雑記……畜産三年　福田善機（54）
カンニング是論……畜産三年　Y・F生（55）
チキン戦争が日本ブロイラーに示す暗示……畜産三年　篠宮考（56）

研究室便り

畜産製造学研究室……（58）　畜産経営研究室……（59）
飼養学研究室……（58）　家畜繁殖学研究室……（60）
家畜育種学研究室……（59）　獣医学研究室……（61）

論文

鶏胚の発育過程における体液蛋白分屑の変化に関する研究……中村輝夫（62）

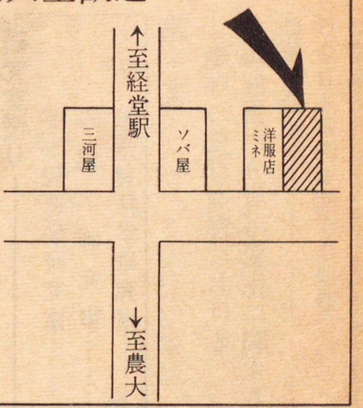
○畜友会便り……杉浦嘉明（69）
○全日本獣医畜産学生連盟について…（70）
○三十八年度卒論一覧表……（74）
○特別会員名簿……（78）
○畜友会規定……（72）

洋酒と軽食の店ダグウッド

AM 11：00～PM 11：00

農大生歓迎





—原稿募集—

編集部では〝ふじみの〟第五号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとする為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いします。

記

メ切 四十年一月末日

要項 ○論文、随筆、記行文、主張
四〇〇字詰一十枚以内
○写真カット、は随意
○表紙図案、三色以内、

宛名 東京都世田谷区世田谷四の四六一
東京農業大学畜産学科内畜友会
ふじみの編集委員会行

発行日 昭和四十年四月二十日予定

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会〝ふじみの〟
編集委員会
TEL(421)五一七五(代)

巻頭言

畜友会委員長　杉本健之

「ふじみの」も早や四号を出版するに至ったが三号雑誌に終らず四号を発行出来たことは、誠に喜ばしいことである。

畜産学科の原動力である畜友会も会員の団結により年々充実され、社会でのリーダーを育て上げているが、貿易自由化の波も犇々と押しよせ、今や畜産も国内体制を強化し外国と競走出来得る生産体制を整えなければならない。

我々も学内だけに留まらず広く世界に目を向け、明日の畜産界に自信と意欲と闘志をもって突進しなければならない。

個人個人が畜産人であることを自覚し、独自の才能を多いに発揮し国際競争にも耐える畜産体制を整えられる技術と人格を社会は求めているのです。

「ふじみの」も社会の第一線で活躍している諸兄と互いに連絡をとり、学内に於ても相互の親睦を計り畜産学科の特色を著わし畜友会を大いに発展させる土台になることを心から願う次第である。

新春を迎えて朗報二つ

畜産学科長　平林忠

昭和三十九年の新春を迎えるにあたって、二つの朗報を畜友会会員にお伝えすることが出来るのを大変嬉しく存じます。

その一つは大学院に畜産に関する四つの講座が次の如く増設されることになったことである。先年以来、畜産学科の大学院設置について運動を展開していたことは諸君も承知のことであろうが、大学当局では新設しない方針を決定したので、既設の大学院に講座追加ということになったのである。ともあれ、諸君の進学に門口が開かれたのであるから、よろこばしい次第である。

大学院（新設講座）
- 農学科　畜産学特論、家畜育種学
- 農業経済学科　畜産経営学
- 農芸化学科　畜産化学

次の朗報は、西川畜産奨学財団設立準備会が去る年末に開催され、役員の決定と同時に監督官庁へ申請手続を提出したので、近く認下されるはこびとなったことである。

この財団を発起した西川哲三郎博士は先年畜友会の名誉会員になっていただいた方である。博士が私財を投じ設立するこの財団の趣旨は博士が多年御世話になった畜産学会や母校農大に対する恩返しの意味で、畜産発展の研究費や人材養成の学費を給与するという。洵にけだかい心のあらわれである。諸君とともに感謝しつつここに朗報としてお伝えする。

マトンとブロイラー

日本配合飼料ＫＫ取締役研究場長
農学博士　西川哲三郎

昨秋、伊豆の大室山のある会合に招かれた。山妻の従妹にあたる荒井久子が、ニュージーランドの招聘で、マトンの本場にマトン料理を伝授に行った。その御礼の印に、肉用種としてニュージーランドで改良されたロムシー種の種羊が贈られた。それを、彼女は、我農大の近藤教授に贈ることにした。その発表というか、儀式というかをかねたニュージーランド産マトンの宣伝の会であった。

景観のよい大室山の野天でのバーベキューは、大いにその目的を達したようであったが、もう一つのねらいであったろうこの大室山一帯を別荘地として分譲している東拓会社のＰＲにも、これまた絶好のチャンスであったようだ。

さて、そのとき貰ったパンフレットを見てぼくは驚くと同時に、自分の迂闊さを恥じた。というのは、我国のマトンの輸入量である。即ち、三十三年には僅かに四トン程度であったのが、三十四年には三五七五トンと飛躍し、三十五年にはその五倍に垂んとする一六、〇〇〇トンに、三十六年には実に二一、五五〇トンに達している。これを生産国ニュージーランドの輸出順位から見ると、第一位の英国、三七、六〇〇トンの次で、第三位のエジプトやヨルダンの四、〇〇〇トンを軽く引離している。あとの方を参考までに申上ると、アメリカ一、九〇〇トン、エジプト一、五五〇トン、ベルギー四六〇トン、ドイツ四二〇トン、オランダ三一〇トンとなっている。

我国で、何故かくも短期日にマトンの消費量が膨れ上ったかというと、肉食の普及に加ふるに、価格の低廉ということだと思う。事実、我家の厨房に於いても、ブロイラーと共に常に冷蔵庫のフリーザーの大半を占めており、来訪者があれば芝生にバーベキューをしつらえて、この両者を馳走するのを習わしとしている。

さて、そのブロイラーであるが、これがまた近年の流行児といえよう。

安くて、うまくて、手間がかからず、調理の範囲の広いことマトンの比ではない。昨年の生産額は一昨年の二～三〇%増の八千万羽といわれているが、恐らくは一億羽に近い生産があったろうと業界筋は見ている。それが、なほかつ品不足で、アメリカから十一月だけでも一・〇〇トンの輸入があった。一昨年の輸入が二八〇トンであったが、昨年度（本年三月迄）は、その十倍以上には達するであろうと見られている。これは必らずしも、一時騒がれた欧州でのチキン戦争の余波とのみは断じられない。それだけの需要がありながら、生産が追つかない間隙に乗じられて「敵前上陸」されたのである。

我国では、広大な草地を必要とするマトンはお手あげだが、集約的に、然も狭い土地を最大限に活用出来るブロイラーを、アメリカ業者の蚕食にまかせる手はない。飼料効率の高い専用鶏種の作出、可及的省力し得る施設、衛生的環境についての知見、より飼料要求率の低い配合飼料の研究等、アメリカに追つき、追越し、一方、従来最大の癌であった消費機構の不備による価格の不安定について、恒久的対策を政治的に講ずるならば、ブロイラーが我国民最大の栄養源となるばかりか、農業部門中、最大の産業となるであろうことは、決して夢物語ではない。

農場実習に対する学生の要望について

石原太右衛門

元、茂原分校に在った農場が、一昨年十二月厚木農場に移転してから、一ケ年余の歳月が夢の間に過ぎ去った。建設途上にある新農場の不便と不自由さから来る生活上の不安をいだきながら引越した職員一同は、今や生活環境にも慣れて、不自由ながらも皆元気で各職場に於て大いに頑張っていることは喜ばしいことである。申すまでもなく、厚木農場は丘陵地で地形に変化あり、その変化を巧くみに利用し機械力をもって、それぞれ果樹、園芸、作物（飼料作物、熱帯作物）、蔬菜、造園、畜産等がうまく取り入れられた総合農場である。

この農場は展望がよく、しかも各種の近代的建築物が整然と建設され、植木、芝草等が公園のように美しく植えつけられ、農場というよりもむしろ厚木農業公園とでも言いたい位の感じがするのは一人私のみではなかろう。恐らく他の大学農場にはとても見受けられない農大独特の味をもっているのが愉快である。

主なる建築物は大部分建設を終り、毎週何百人かの学生が実習にやってくる。都会から離れこの農園で新鮮な空気を吸い軽く汗を流すのも健康上どんなによいことか。従って、この農場実習を楽しみにやって来る学生も少くない。

さて外観は以上述べたように極めて立派であるが内容はどうか、勿論これから場長始め職員一同の努力によって漸次拡充強化されてゆくものと思はれるが現在行われている実習に対して学生はどんなことを考え、どんなことを希望しているか、参考のため一部の学生に対し忌憚なく感想を書いて貰った。その中に要望された事項を取集めてみると次のようになる。

一、実習時間特に終了時間は厳守してほしい。
二、実習開始前にその目的、意義等を一応説明してにしい。
三、土方や農夫のように単なる労働力の提供では困る、もっと農学的技術指導に努めてほしい。
四、いつまでも原始農業では困る。播種、除草等もっと圃場に機械力を取り入れ、農業の近代化を計り得るように指導してほしい。
五、隔週一回の実習では物足りない。或期間経続して集中的にやってほしい。（夏期実習のように）
六、実習時間が少いのでもっと効率的にやってほしい（例えば遠距離の実習には昼食弁当を持参するとか）。
七、農具は多いがろくなものがない。鎌は切れない、刃がかけている。これでは能率が上らない。農業には農具が一番大切であることを一層認識させるべきだ。
八、鎌や鍬の使い方、草の刈り方等農具使用の基本的な指導をしてほしい。
九、雨天の際には実習を止めて、本校で講義するか農場で作物の品種や種子等について実物教育してほしい。
十、更衣室が狭くて困る。一室五人から十人程度にしてほしい。又廊下が不潔である。屑籠をもっと増し、洗面所には石鹸を準備してほしい。尚一輪の花でも生けてあればどんなに慰められるであろう。

十一、食堂（ホール）を学生に開放して、自由に利用させてほしい。又ホールにはテレビやラジオの設備、お茶の提供もやってほしい。

十二、スクールバスを利用して更衣室前まで運んで貰うか、又は現在本厚木駅から運搬のバスを更衣室前まで入れてほしい。

十三、道路をもっと整備してほしい。

十四、時折、農場生産物を試食させてほしい。

以上の他全般に機械に対する関心が高く、従ってこれから実習時間を増してくれとか、或は分解、組立実習をもっとやってくれとか、又希望者が休暇を利用して機械の実習が出来得るような措置を講じてくれとか、更に実習中負傷した時は大学で治療費を支払ってくれとか、昼食代を大学で負担してくれとか、農業基本法と農場実習との関係如何とか、経堂の集合時間等に対しても再検討してほしい等いろいろの要望が述べられてあった。

斯様に、各般に亘って要望があったので、これを農場主脳者に供覧し、出来得るものから実行に移して行こうと言うことで既に二三実行されたものがある。私の関係している実習は毎週行われている普通実習と、夏季（畜産学科一年、農学科一年対照）又は春季（農学科二年対照）に於いて六日間又は十二日間に亘り行われる集中実習とがあるが、この他に拓植実習、畜産実習（畜産学科三、四年対照）、教職関係実習等で、職員の苦労も並大低でない。特に畜産実習についていつも心痛していることは、実習上必要な教材や管理者の少いことである。畜産実習は圃場実習とちがって教材が少いと勢い講義が多くなったり、説明程度に終ったり、或は一部の学生にやらせてそれを大部分の学生が見学する程度に終って実習によって貴重な技術を身につけることが困難である。所謂、単位をやるための形式的な実習に終って農場存在の使命も薄くなって了う。勿論経営上黒字がどんどん出れば生産農場としての意義もあるが現在のように赤字が出ては農場存在の使命が一層薄すぎると言っても過言ではなかろう。又管理者の少いことは勢い家畜、家禽の飼養頭羽数にも影響しているのでこの際管理者の増員と共に事業を積極的に推進することこそ充実した実習と赤字の解消になり得ると信ずる。

以上は学生諸君の要望に伴い農場を一層よりよいものにしたいという一念から出た私見ではあるが考えて見れば、新農場は未だ完成していない。建設途上にあって軌道にのっていないのだから現段階に於いては内容の不備も赤字もまた止むを得ないだろう。この点、学生諸君も諒とせられ、理想的農場の建設に一役御協力を切望して

止まない。最後に御参考までに現在に於ける畜産関係の建物、及び飼養中の家畜、家禽の頭羽数を次に示してみよう。

一、建物（工作物を含む）単位平方m

牛舎（乳牛二十頭収容）一棟（一九六）、分娩搾乳舎　一棟（七九・二）、種牡牛舎（飼料室、事務室を含む）　一棟（七九・二）、緬山羊舎　一棟（七九・二）、堆肥舎（階段式）、倉庫（二階建）一棟（一三八・六）、種豚舎（仔豚育成室を含む）一棟（一一五・五）、孵卵育雛舎（飼料室、器具室を含む）　一棟（一四八・五）、大雛育成舎（四〇〇羽収容）　一棟（八二・五）、種鶏舎（五〇〇羽収容　一棟（一三二・〇）、第一採卵舎（六七〇羽収容）　一棟（一一五・五）、第二採卵舎（三一八羽収容）　一棟（七九・二）、大型サイロ　二基（容積三・五屯詰込、長径三九・六m、深さ七九・二m）

二、飼養頭羽数

㈠　牛　乳用種牡牛一頭、搾乳牛一三頭（内ジャージー種四頭）　犢牛六頭

㈡　豚　種牡豚（ランドレース種）一頭、種牝豚　六頭（内ランドレース種一頭、ヨークシャ種五頭）

㈢　鶏　採卵鶏七三五羽（単冠白色レグホーン種四一二羽、一代雑種三二三羽）

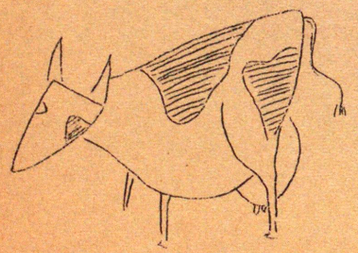
㈣　鶖鳥　三羽（雄一羽、雌二羽）

㈤　鶖　三羽（雄一羽、雌二羽）

備考

㈠　昭和三十九年度に於いて肉豚舎一棟、単独鶏舎（種雄収容）二棟建設の予定

㈡　昭和三十九年度に於いて種鶏五〇〇羽育成の予定



畜産政策の見方

今年度の農政に対する畜産のしめる割合は大きく、その行われんとする政策を良く把握し今後の畜産発展と参考のために、各地域で実施し指導されている方々の見解をここに記載した。

1 畜産行政の見方　東北農試畜産部　佐々木泰斗

2 養鶏業者の見方　丸岐孵卵場　椎野志郎

3 学生の見方　中里憲司朗

東北地域と酪農政策

東北農試畜産部　佐々木泰斗

一、はじめに

近来農業のうちでも将来進展の可能性の高いものを成長部門と称して、畜産と果樹園芸があげられているのである。果樹関係は着実に発展しつつあって、成長産業としての名をはずかしめない立派なもののようであるが、一方畜産においては施設やその他に対し投資が多い割合に収入も少なく、なかなか思うように伸びないもので、一部には畜産をもうからない成長産業として悪評すらもあるようである。このように酪農は単純によろこぶことの出来る産業ではないようであるから、どうしても国および県などの政策や指導も総合的に手のとどくように十分なされなければ発展が望めないであろう。

二、酪農が導入された東北地域

馬産地東北は終戦後農業経営改善のために大きく酪農が導入されたのである。そして水田酪農、畑地酪農、山地酪農、河川敷酪農などの新語と共にあらゆる地帯に酪農が導入されたのであるが、その後年の経過と共に水田地帯のように価格の安定している米作では何にもか苦労して酪農をやる必要があるかということで、段々衰をみせてきたのである。しかし山地、畑地および開拓地のようなところでは目ぼしい作物が少なく農業経営の安定しないところでは先ず酪農ということで可成の重点が酪農にかけられてきたのではあるが、幾多の問題が山積され、本当に安定した酪農の実現は遠い彼方にあるようであった。そこで強力な酪農振興のため法律が制定され、これによる国や県の密な指導をされるよう酪農民によって長いこと待望されていたのであった。

三、酪農振興法の内容とその運営

待望の酪農振興法は昭和二十九年制定され三十四年には改正をみたもので、この法律によって大きく酪農を保護育成しようとするもので、その内容とするところのものは、集約酪農地域の指定、草地の改良、集乳乳業の施設および生乳の取引などの問題を取扱っている。

(一) 集約酪農地域の指定、その地域内の農業の発達のた

めに酪農を振興させる必要があると認められる一定区域を知事の申請にもとずいて農林大臣が集約酪農地域を指定することができるもので、この指定を受けた地域では重点的に種々の施設、指導、融資などが行なわれるので東北各県では競って、これが指定を受けたのであった、結果として少ない県でも一～二ケ所、岩手県のような酪農県では全県が指定の区域に入っているようなところもある、そしてここに酪農の重点施策がなされるのであるから、何というてもその恩恵は酪農家にとって大きいものである。

(二) 草地改良、昭和二十八年度から実施された草地改良事業もはじめは多くの問題を含み一時はどうなることであろうと心配されたのであったが、その後研究と実際が共どもに進むことにより、大きく道がひらけ今日では公共事業として酪農の飼料基盤確保のためになくてはならない重要な存在となり、今後益々進展を予約されているような存在である。

(三) 集乳、乳業施設、集約酪農地域内における乳業施設が乱立することなどによる酪農家の被害を防止するためにとられる施策であって、集乳乳業施設を新たに集約酪農地域内に設置するときは知事の承認を受けなければならない、これも当然酪農発展上とらなければならない処置である。

(四) 酪農経営改善計画、集約酪農地域内の市町村は酪農臣営改善を図るために計画を樹立するのであるが、その内容としてもられるものは乳牛の導入、生産、更新、牛乳の生産処理、乳牛の飼養管理の改善、草地の改良事業などであるから、この改善計画は酪農家にとって非常に重要な意義をもつものである。

(五) 生乳の取引、酪農の盛衰はかって乳価の問題にあるようで、この乳価は一方的にメーカーによって決定され、その変動が甚だしく、ために酪農家は苦しみ酪農意欲に大きく影響するばかりでなく、常にメーカーと酪農家の争いのもととなって、平和な酪農郷に不穏な空気をかもしている、このメーカーと酪農家の関係は密接不離な血のつながりが必要であるのであるから、乳価問題によるなやみは何とか排除したいものである。このために各県の知事は本法によって斡旋又は調停を重ねているが、なかなかこの程度のものでは問題解決には程遠いようである。

四、乳牛の貸付

乳牛は高価なもので、現在の農家の収入をもってしては乳牛の購入は困難である。農家の乳牛所有はこの貸付制度によるものが多いことは調査によっても明らかにさ

れているところである。しかしその資金の出場所は世銀、国、県、団体など様々で又その行き方も異なるので、これを強力に一本化してもっと酪農家のためになるようにしたいものである。

五、酪農の発展のために酪農政策を

(一) 酪農政策の運営と人、現在の酪農政策の内容を見るに以上のように可成広範囲なそして詳細な点に亘って網羅されている立派なものである。要はこれを運営する人々と協力体勢如何にかかっているように思われてならない。

(二) 貿易の自由化を前にしての酪農、貿易が自由化されれば、わが国のような生産費の高い酪農生産物はひとたまりもないであろうと言われるが、これとても生産費の切り下げは一人り酪農家ばかりでなくメーカーも販売業者も一致協力して行くところに始めて完成されるものであって現在のように各々が擦りあいではどうにも発展性がない。

(三) 牛乳の国内利用の増大、酪農家が生産意慾をもやし乳牛をふやし、牛乳の生産が少し多くなると、すぐ生産過剰の様相を呈し乳価は下落し酪農家をがっかりさせている、このようなことがしばしばくりかえされてきたのであった。これが対策としてかって学校給食に牛乳をとり入れることによって救われたこともあるのである。現在問題になっている輸入脱脂粉乳と国内生産生乳の学校給食えの利用も各界が協力すれば学童のよろこぶ生乳を飲んでもらい、そして酪農振興にも拍車をかけることになるであろう。

六、おわりに

胞弱視されているわが酪農も乳牛の導入、飼料基盤の増大確保、生産物の流通などについて各方面の血のかようような心からなる協力があれば貿易が自由化されようとも安定した盤石の酪農が完成されるであろう、そして恵まれなかった東北地域の畑地帯、開拓地、山村などの農家が立派な生活が営めると共に国民栄養はいやが上にも向上するであろうことを信じる者である。

（農林省東北農試畜産部飼料研究室長）

日本の養鶏を発展させる為に

丸岐孵卵場各務原養鶏研究所
椎野志郎

私は鶏の育種という内面的な仕事にたづさわっている関係上、養鶏産業に対する大局的な見方も持ち合せておらず、またその立場におりませんので、とても政策などと云う事は書きようがありませんので、常日頃、私が考えている事をお伝えいたします。

一、育種を進め種鶏を輸出しよう。

ここ数年前より、外国雛の日本進出が活発となり国内の多くの孵化場が充分な比較調査をせずに先を競って外国（主に米国）の孵化場と提携した事は、ヒナの良し悪しにかかわらず真剣に鶏の育種にたづさわっている者にとってはなはだなさけない気持がいたしました。わが国にも外国に負けない有能な育種家や優れた系統の鶏が沢山おりますので、これから一層改良を進め外国に輸出し日本の輸出産業の一つにしたいものです。人類が存在する限り養鶏産業は必要だろうと思いますので、今後ますます発展する事でしょう。日本人の力を世界に知らせる為にも鶏の育種は日本人の手で進めましょう。

二、国内の生産物を飼料に活用しよう

わが国の養鶏飼料はその大部分が外国に依存しております。それでも養鶏は農業部門に於ては最も利益率の高い産業として注目され、年々専業養鶏家が増加しています。しかし、飼料の量、および価格の安定なしには将来性のある養鶏産業は成り立ちません。少くとも飼料の五〇％以上は国内で生産し活用せねばなりません。現在、アメリカより多量のアルファルファ・ミールが輸入されておりますが、これなどは是非とも国内で生産したいものです。また我国は濃厚飼料として優れた米糖が多量に生産されますので、もっと有効に利用しなければなりません。

三、防疫対策に力を入れましょう

外国ヒナの日本進出にともない、新しい病気が各地で発生している事を耳にいたします。現在おこなわれている検疫を一層強化する事も必要ですが、今からでは遅すぎる感がいたします。そこでこれから特に専業養鶏家は鶏病を自衛する事が必要となってきました。また我国では鶏の病気専門の獣医は非常に少なく、まことに心細い感じが致します。これからは養鶏の盛んな地方の家畜保健所には専門の獣医を置き正確な診断と適切な処置をとれるようにしていただきたいと思います。

四、教育および技術指導は最も大切です

教育によって優れた技術者を数多く養成し養鶏技術の指導および普及に、国および県で力を入れるならば養鶏産業は著しく発展するものと考えます。現状では飼料会社、薬品会社や孵卵場の技術員などによる現場指導が一部行なわれてはいますが、これにもいくつかの問題があります。養鶏技術普及員の育成は一年でも早く行なってもらいたいものです。身近な問題として農大に養鶏学科を設ける時期は来ております。近年稲作が年々豊作を続けていますが、これなどは技術指導が高度に進み、農家の人々もその技術をしっかり身につけ、それを実行した結果だと考えます。今日養鶏は優れた指導者を要望しています。

書き終えてみると編集者の意図した問題とは多少ずれた感がいたします。

養鶏は比較的に近代化している関係で今日では政府の保護育成政策はほとんどなく、しかも自由経済の動きにふり落される事なく発展して参りました。しかしこれからは強力な政策が必要になって参りました。

経済は掠奪から始まりかくして農業は粕

中里憲司朗

昔々の大昔、我々の祖先が、体の一部のみを覆って生活していた時代、世の今昔に係らず人は人、真地目も居れば、怠者も居た。怠者は、大体において、頭が弱くて、胃が強い。従って体がデカイ、余計に食べる、食物は無い、そこで弱い真地目な連中から奪う、すなわち掠奪だ

弱者は考える、「殴られる前に与えてやれ」。これは貢物、賄賂の起源だ。賄賂は身を守る、何時の世も不変だ。強者を中心とする集団が出来上る。集団と集団の戦争ゴッコ、戦争の起源だ、掠奪が目的、「聖戦」なんぞ存在しない。さて戦争は始まったが、そこは神様の造り給う

た人間の事、聊か性能の秀いのが現れて、「まぁまぁ！一つ穏便に」、という訳で、余物と余物との交換へと進み、その場が「市」。以後、遙々と続いて所得倍増迄、経済の誕生は内面的には、欲求、外面的には掠奪、欲求は、積りこそすれ減退することなく今日迄、たゞ掠奪の方法が巧妙化して来たに過ぎない。相手を喜ばして奪う、これが最も理想とされるに至った。

驚意的経済成長と言い、高度成長率とも言う。実を正せば、「金融引締」の掛声だけでガタリと来る代物だが、ともかく日本経済は発展した。そして二重構造症を起した。農業と他産業との経済的拡差。農業の鈍足と他産業の俊足が引起した結果である。だが農業も好き好んで遅くなったのではない何ものかがそうさせた。こゝに巧妙なる掠奪がある。

農業の領域は、昨今著しく狭められてしまった味噌、醤油、各種漬物、麺類、うどん、酒、砂糖、豆腐、こんにゃく、納豆、佃煮、瓶詰、燻製、塗物、各種工芸品に至る迄、全てこれ農業の範囲にあったものである。それが何時とは無しに、農業の性格を失い、企業化され、逆に親を苦しめる結果ともなってしまった、農業として残ったものは、自然的要因が大で、最も企業化されにくい、「粕」のみである「農業の企業化」、「主産地形成」、「農業の近代化」、大いに結構しかし、「農業粕論」その性格を正しく認識する必要がある。比較的、利潤の多いと言われる畜産養鶏業においても、海からの大資本が狙っているとか、いないとか、日本経済の二重構造の是正には、農業の一大飛躍が必要であることは間違いない。しかし、今や「粕」となった農業に、それを期待するのはどうであろう。何故にそうなったか、そこには巧妙なる掠奪があった。一面において、他産業の成長こそが、農業の進展を阻んだとも考えられるのである。しかし、その善悪を論じているのではない。常に、政策は全体的立場から施されるものであり、経済についても同様であろう。資本主義社会の発展は、限りない利潤追求こそ源動力である。従って、必然的にそこには、勝者、敗者が生れるが、しかし敗者もそれで終ったのではない。その各種用役は、新たな産業を開拓して留まることはない、そして又、掠奪。

空巣に入られると腹を立てる、だがもっと悪質な盗人もいる。それには気附かない、考えよう、人間社会の、健全なる発展と、より良き幸福のために。

夏期実習

畜産三年　谷本克則

昭和三十八年八月十二日、我々東京農大畜産学科二年のクラスメート、十数人は、夫々のスタイルで、どこからともなく、札幌駅に集まって来た。十二時五十五分発急行阿寒で雄大な狩勝峠を越え、新得に着いたのは、もう夕方の五時近く。そこに待っていたものは、護送車であった。いや護送車ではないかと思われる様なトラックが我々集まった十五人を新得の町から連れ去った。ガッチリとしぼられるだろう、この北海道立新得畜産試験場は、狩勝峠からすぐ見下ろせる所に有った。この試験場、南北に長く約十キロも有り、東西に狭い緩傾斜地で、気候も夏が短く、冬が長いあまり農業に適さない所の様である、そして西に日高山脈、東には我々の来た新得市街に致るのである。市街とは完全に離れており場内に、この職員のみの住宅が建ち並び、一つの部落の様な物を作っていた。この広い牧場での実習なら、悪くもないと、そんな気持さえわき出るのである。十三日には場内見学、あまりお目にかからない牛や馬、そして広い場内には川も流えている。天候はすこぶる良好、早く何か実習がしたくなった。夜になって、各三四人ずつ、牛馬豚鶏製造とグループを作って夫々自分の好きなグループを選んだ。実習の前に、この試験場の牛をのぞいてみると、総面積十六万四千四百二十五ヘクタール、建物敷地一万一千四百十九ヘクタール、飼料畑四千三百ヘクタール、採草地二万一千七百八十ヘクタール、放牧地二万四千八百七十ヘクタール、人工林二万二千八百ヘクタール、天然林混牧林七万九千二百二十六ヘクタール、草地造成一万ヘクタールとなっている。又家畜は、乳牛ではホルスタイン九十七頭試験牛十一頭・肉牛では、ショートホーン四十五頭、ヘレフォード三十七頭、和牛十一頭、試験牛四頭・馬ではペルシュロン八十八頭、ブルトン一頭、北海道和種十一頭、耕使役馬十四頭、豚は、中ヨークシャー百五十九頭、バークシャー二十七頭、ハンプシャー五十三頭、ランドレース七十二頭、試験豚十五頭、鶏はつい最近滝川に大部分移って行き、今は七百羽のみ残っていた。その他蜂が五十七郡いるとの事である。そこで自分は、鶏を選んだ。ケージと平飼が約半々で、手間から云えば、ケージの方がはるかに少ない。各鶏のケージには毎日の産卵記録が書かれ、見解けも容易である。その上、不断給餌で、立派な成績を上げている。おじさんの話によれ

ば、昔は平飼一本で大変苦労もしたが、今はこのゲージによって、うその様に楽になった。との事である。産卵成績は平飼と比べても、あまり差はないが、このところ、平飼が、やゝ有利な様である。卵は割合大きな、つぶそろいである。完全配合を使って、四円弱の飼料代とのこと。この大きな試験場、生産物は皆安く売るため、年間の赤字二千万円を上まわるとの事。ところが只一つ、鶏だけは、立派に黒字を守り続け、独立した形にあるとの事である。たしかに他の家畜に比べて手間もかからない。鶏は卵を生産する機械である。とよく云われるが、ここに来て、その言葉がぴったりする様に思われた。でも機械と異なる事は情がわくことだそうである。おじさんは何十年も鶏と生活して来て、他人と自分との見解けぐらい鶏もつく、と息子でも見るような目で、卵生産機、鶏を見つめていた。又おじさんは面白い事を予言して、それが二度までも、ぴたりとあたった。新得は多い所とか、我々が終った日も曇っていたが十三日は快晴、十四・五日は二日間雨が降り続いた。十五日に、おじさんの予言があった。「今日は鶏がシリつつきをやっているな、明日は晴れるだろう」。だが空は一面低くたれこめた雨雲で、何時上がるかとも知れない雨が、降り続いていた。誰も明日晴れ上がるなど思っていなかった。ところが十六日、朝、太陽の光に目が覚めた。そんな事が二度まであったのだ。これも長年の経験と、鶏への愛情ある観察からなのだろう。あらためて我々も、鶏への愛情が芽を出した。養鶏は一羽による利益など微々たるものだ。だから大羽数の養鶏が有利になる。我々は仕事のあい間に、そのおじさんと、のべつ話をした。そこで経験と理論とは、どこかに違いの生ずる事も知った。やはり経験の方が確かな様だ。自分の心にも、養鶏の面白さ、むづかしさ、そして、やりたくなった。一千羽養鶏をするには、どの位の費用を必要とするかという事で、おじさん達と計算もやってみた。土地が有れば、百万円で、なんとか出来そうである。五日間は、実に早かった。十八日早朝、ジープで新得駅迄送られ、又皆思い思いの方向に、散って行った。我々もこれから、北海道の各所を廻るべく、列車に乗った。十七日には場長、副場長も加わり送別会をやってくれた。いい場長だった。何時だったか、数人で新得の市街迄歩いた事があった。かなりあった。その帰り、駅前で場長に会い、ジープで一緒に帰った事が有った。あの時何の話をしただろう。

パチンコの話もした、又我々をはげましても下さった。あの鶏のおじさんと場長の顔が、まだ目の前にちらちらしている様であった、ふと車窓を見ると、狩勝峠にさしかかる所であった。この雄大な平野の中に、あの新得畜産試験場も有るのだ。又再び来てみたい。そして、あのでかいドンブリで、飯を山盛ついで、しぼりたてのあの牛乳を腹一ぱい飲みたいものだ。

共同経営

畜産三年　坂井忠衛

私はこれからの農業は企業化でなくてはいけないと思っている。実習先の増我さんも、農業の企業化をとなえ、現に養豚株式会社を作り成功している。では農業の企業化とは何か。それは、農業が第二次、第三次産業と肩をならべ、企業として存在し発展しうるだけの採算がとれる様になることである。端的にかけば、工業における生産および経営の原理がそのまま農業に適用される様になって始めて、農業は企業化され近代化あれたといえるのである。（自由十一月号より）

そこで、その企業化への道は共同経営が近道であり、有利ではないかと思うにいたったのである。これから北陸地帯の米作地帯を場とした私の考えを書きます。

最初に、中期頃の農業状況というものは、農民は地主、高利貸しから強度に搾取された。この搾取されたものは利潤の高い工場の方へ回され、農業方面への投資というものはされなかった。そして、搾取しつくされた農民は安い労賃で働かされた。あげくのはては失業になった。要するに縦のつながりが強かったのである。そして、潜在失業者が多くて、産業予備軍だったのである。今では小作から自作農に変ったが、有機的構成が高いために高い税金を払っている。それに、零細農業が多くて、出かせぎが多いから産業予備軍であろう。だから横のつながりを強くすれば良いと思う。すなわち、数農家が集まり、有機的構成を下げ、税金を少なくするのである。

もう一つの考えは、現在の一農家の耕作面積は一ヘクタール位が多いということである。この少面積に各種の農機具を備えて、価格の安定している米作を行っている。貿易が自由化されれば安い農産物の輸入のために価格が下るのである。もし、農産物が完全自由化されたならば三十六年度に対して牛乳は水準の五一八割、牛肉は五一九割程度まで下り、米価も少し下がるそうである。それに米の増産は終り、米質（味）の改良が必要であろう。そうでないと、米を食べなくなってしまう。そして勤労者との所得の格差が大きいということである。

前例の様な問題を解決するのには、一農家が近代化資金を借り入れるか、数農家が集って数十万円ずつ出しあい足りない金額を借り入れる他ないと思うのである。経営というのは「いかに大くの所得を上げるか」によるからである。

個人経営では「米の単作だけでは利益が少いし、有機肥料不足で地質が悪くなり収量が下がるから畜産を取り入れる」こととなる。そこで、自己資金と借入資金で設備等を購入し、家畜を飼育する。しかし、労働の面では農繁期の時には稲作の方面が忙しくなり、飼育管理が粗雑になりやすい。その結果病気が起りやすいものである。そして、飼育頭羽数というものに労働時間、労働者というものに限度がある。副業的なものでは利益が少ない。かといって、畜産だけをやろうと思っても資金がないからちょっと無理である。他に野菜をやったとしても生産価格の上下が激しいから困難である。最後に農機具についていうと、一農家が数種類を購入していることは利用率の方から見ると不経済である。その様なわけで個人経営は所得に限度があると思うのである。次に共同経営に入いろう。共同経営は農民達が出資しあって経営するもので、数種類の経営方法がある。私は家計を分離した他の農業の共同経営が良いと思う。これは個人経営よりも大規模な経営が出来、農機具の数を減らすことによって利用率を高めることが出来るのではないか。それに、数人で仕事をやると能率が上り、余暇を楽しみ楽な農業が出来る。そして、分業することによって狭く深く知識、技術を得られ、労働力もあるから生産高が上るのではないかと思う。

現在の共同経営について見ると三十三年以前に設立したものが全体の約八%、三十四年が九・五%、残りの八十二・五%というものが三十五年以降に設立ということになっている。（昭和三十六年二月）同じく三十六年の八月では、三十四年以降のものが九十三%になっているから、一種の流行的発生の様に思える。前の数字では共同経営が伸びている様に見えるが、実はこの間にかなりの解体部分が含れている。全面経営の場合では一年半で六十増加ということであるが、実は解散した共同経営が七十七ある。つまり新設と解散と相殺した結果が六十の純増になっているのです。

この様な解散の要因を項目的に整理してみると、

(1) 人の和が悪くて、リーダーがない。
(2) 共同化した場合の技術が不確立である。
(3) 赤字が出た。
(4) 共同経営を安定さすための次の資金投資が出来ない。

(5) 価格の変動のため

というのが普及員のアンケートに上っている。それで、成功するために自分の考えを言うと、

(1) 近縁関係の農家とリーダーがいる。
(2) ある期間を決めて農閉期に先進農業を見てまわって知識、技術を身につける。
(3) ある期間内に自己資金をたくわえ、他己資金との割合を六十%以上にして、強固な基礎を作る。
(4) 中農以上である。
(5) 商品生産をする以外にない。

と思っている。この事項は個人経営にもあてはまるが、ある期間というものが長く、共同経営に比較して低い限度があるのではないか。この様な理由で「共同経営が有利である」と思う。まあ簡単に書いてしまったが今後もっと深く研究して見たいと思っている。

酪農の内幕

畜産三年　角田幸雄

休暇のたびに田舎へ帰省すると、翌朝早くから俺の睡眠を打破る金属性の音が隣の集乳所からやかましくひびいて来る。ふと目覚時計を見ると午前六時頃である。普通の農家ではこの頃主婦が起床する時間である。もうこの時は持ち寄った牛乳を牛乳カンに注入して出荷の準備が終了している。俺の村では乳牛を飼って居る家と普通の百姓をしている家との見別け方は朝五時頃起床する事である。村民の言葉に酪農経営が発言される様になったのは、俺が中学生の頃である。その当時を思い起すと、深秋の寒い日の午後、学校帰りに農協前を通り掛けると乳牛の仔が何十頭と集って居て、各々新しい飼主に連られて行く光景に出合った。そして「乳牛は乳を搾れば儲る」と言った一農民の言葉を今でも強く記憶している。当時は米麦の中心農業が丁度曲り角に出ていて、その上、短期間労働で農家の現金収入の糸口であったまゆの価格が低価になり始めたので農家の収入が減少して来たのである。そしてどうしても早く現金が得られる物を求めて居たのである。そしてこの様な単純な考えで農家の人は乳牛に関しての無知識と無計画のままその仕事に突入して行ったのである。現在、その当時の色々な点を探求してみると、まず酪農経営に踏切った人達は不思議な事に大部分が四～五反位の耕作面積の所有農家である。そしてやはり純農業所得の収入が限界に達したためだろうと

思われる。そしてこの様な農家は仔牛を購入するのに自己資がないために資本を農協から貸りて仔牛を購入したのである。そして仔牛を受入れる態勢は全く出来ていなかった。今までの役牛を処理して、その畜舎で飼って居る状態であった。従って設備は0であり、また飼料も配合飼料を購入して乳牛に与えて居て、農家自身の飼料栽培は全々していなかった。そして乳牛の衛生管理の知識はまったくなかった様に思われる。やがて農協でも本格的な指導に遅かりしも入り出して来たのである。そして又、設備投資の貸付がおこなわれて、農家はサイロの製作や畜舎の改築を行った。しかし、まだ乳牛が搾乳出来る段階までに達して居なかったのである。そして最初の農家の人達の考えは、農作業の片手間に乳牛でも飼って見るかと軽い考えを持って出発して居たのである。やがて成育して種付の時になり、この頃から順調に事が運ばれなくなって来たのである。何回も種付しても発情が止らず、ついに卜殺に出してしまったり、お産で親牛を廃牛にしてしまってその後に来るものは二、三年間飼育していた乳牛に掛た経費の問題が後に残るのである。その多分の経費は農協に借金の型になって残って居る。また農家の少ない収入からの借金の返済は重荷であると思われる。又農作業の日雇労働に忙しく、乳牛の管理まで手が廻らなくなり途中で止める農家も出て来たのである。この様に完全に失敗した農家も数多くあるのである。また色々な障害を乗り越えて来て、現在搾乳を続けている農家でも経営面でまだ悩みが残って居るらしいが忙しい季節には共同作業したり、又共同牧草地を所有し、明日に希望を掛けて色々と経営の改善に努めている様に見受けられる。そして自分達の力で安定した生活を求めるために昼夜努力して居るのである。

農業志望

畜産二年　西野正子

〝光陰矢の如し〟のことわざ通り、自分が農大へ入学してから早や八カ月、大学生活最初の一年も終ろうとしている。

今でもそうであるが、入学当時よくこう聞かれた。「君の家では何をしているの。農業か畜産に関係があるの」「なぜ畜産学科へ入ったの」。すると決って「動物が好きだから」と答える。自分でもなぜか知らぬが、中学時代から「大学へ進むなら〝農学部〟へ入る。そして、卒業してからは、農村へ入ってお百姓さんになるの」と言って、両親を驚かせた。「大学へ入るところまでは分るけど、お百姓さんになると言うところが分らないわ」とよく友人に笑われたが、その頃は漠然とそう考えていた。

数年前から〝曲り角に立つ農業〟と騒がれ「なぜ農村から若者は去るのか」とか「農村の嫁飢饉」などと、農村人口の減少がマスコミに随分と話題にされた。

農村青年が住み慣れた村に背を向け、去って行く。都会に憧がれて出て行くのか、それとも古い陰習や、悪い労働条件からのがれるためなのか、このように、年々農村青年が減っていく、それでなくとも悪い労働条件や風習、文化から遠ざけられている農村が、老年や中年の、残された人々の手にゆだねられるのだから、いくら「農村、農業の近代化」が叫ばれてもその原動力となる若者が団結し、協力する事なしに農村を逃げ出すのだから、なかなか「農業の近代化」が進まない。「逃げ出す前に若い力を団結し、それにぶつかってみよう」。などと言うと、彼らは「何を言ってるんだ、農業の経験などないくせに」と言うかも知れない。確かに農業に関しては全く経験がない。自分が農村生活らしいものを経験したのは、夏期実習で十日余りを厚木農場で過したのが初めてであった。早朝、まだ露を含んでいる草を「鎌」を手に

し、刈り終った時の楽しさ……。〝デントコーン刈り〟〝牛・豚・鶏の世話〟〝サイレージ〟などと見る事、聞く事、する事すべてが珍らしい事ばかりだった。手にマメを作ったり、虫にさされたり、そのような事もあったがその実習中に経験した事が自分をますます農村へと引っ張って行く。帰郷した時「曲り角に来ている農業と言われているのに、都市で育ったあなたが全々経験のない農村に入るなんて、随分変っているわね」と友達に言われた。

〝好きこそ物の上手なれ〟とことわざにあるが、自分が農業が好きなんだから、農村に入ろう。辛くとも苦しくとも乗りきる事が出来るだろう。たとへ農村から都市へ出る青年が、どんなにいようとも……。

自分は大学を卒業し、何年か会社勤めをし、その後、勤めをやめて、日本一小さな牧場と果樹園を持つだろう。そして自分の成長と共に、それらをだんだんと大きくして行こう。それから、「農村、農業の近代化」のために出来るだけ力をかそう。自分はまだ若いんだ。〝若さ〟と〝力〟があるんだ。

一歩、いや一ミリずつでも良い、前進しよう。

ブラジルに発つ男

畜産四年　沢畑誠

私がここに紹介する「日記」は、今春ブラジルに単独移住した、ある若者が青春のエネルギーを〝可能性の大地〟ブラジルに求め、一生を開拓にささげるに踏み切らせたこの若者の〝心の遍歴〟とでも題すべきものである。彼が私に残していった一冊の「日記」の中より海外移住を志す若人が、〝何是〟〝何の為に〟渡るのか……彼が残していったこの「日記」の中に、雄飛を志す若人の共通の解答が重っているような気がするのでここに紹介したい。

〝観念への忠実なる道〟

私はこの世に生きる事が苦しく思う時がある、そしてだれも私という人間の一切を知らない土地でスタートから新たに人生を振立ちたく思う、自分という人間が常に勝手であり我儘である事が苦しく思う事があり、又世の中の矛盾を指摘しながら自分も又、矛盾した行動をする事が私にはたまらなく、罪悪感にとらわれる。私自身少しでも観念に忠実な道を歩みたいと思い続けるが度々私は、私自身に泣かされ、苦しまされる日がある。漠然とした「新しい日本」の為に私は何かしなければならないと思う。何をすれば良いのかも知らないし、又自分自身にも打ち勝つ事が出来ない。私が考える事を文章で書き表す事が現在の私の精一杯の「観念への忠実なる道」である。

昭和三十七年三月二十日　記

一　路

十代も今年が最後、十九の春を迎えて今年の課題の重要さを身にしみて感ずる。

二十代に私はこの果てしない大空にはばたかねばならない。二十代も最初の三年の内と確信する。現在までの私のすべてあらゆる能力に頼り又、それを信じ私は渡伯する事となろう。移住という問題であり、又気持の変る事も充分に有りうる。しかし私の場合、移住という行動が必然的なものにさえなってきている。「学而不思則罔

思而不学則殆」私はこの言葉に対して忠実に一生を生きぬくつもりでいる。それに加えて農業を営み、人間性の追求に、そして次世のあらんべき世界のモラルを私は造り上げねばならない。世界各国からの人種の集り「南米」このありとあらゆる人種の中に融合した文化こそ次世文化ではあるまいか。

その中に個人の自覚を主体とした社会が生れても何の不思議もない。全学連の友の社会矛盾に対する気持から起る行動も解らぬではない。しかし現在の社会矛盾の解決は過去幾多に渡って行なわれた革命では無いのだ。

革命により解決されるべき問題はもうほとんどないと見てよい。現在の社会矛盾は体制から生ずるものでなく人間個人から生ずるものである。体制の変革をこれ以上くり返して何になろう。

社会矛盾に対する解決方法は唯一、個々の人間の持つ人間性をいかにして高度なものにするかという人間個人の変革、もしくは向上にほかならない。人間には限りない欲望と惰性がある、個人個人が人間の持つこれらの悪を征服した時、人間は真に生きる喜びを味わうのではあるまいか。

人間がこの地上に神によって生命が与えられた瞬間から、一生涯背負わされた使命、それは「学」「思」「行」であろう。個人個人の人間によってこの三課程を踏み歩む路はことごとく異ったものである、そしてこれら無数の人生に対して人間は評価力を有さないのである。我々が行動する中には目的があり、結果の表示出来る事柄が大部分である。結果があるからこそ我々はそこに意欲を持って行動するのである。可能性を信じ結果を前提とするからこそ我々は行動を起す。しかしながら人生という全過程を通して見つめた場合は違う。個々の人間が目的を持ち、歩んでも結果は必ずしも結果としては現われない。一生涯信念を持ち続けて歩んで来た道であっても良し悪しはもとより不動の評価さえも得られず、ましては多くの他人との比較等絶対的不可能な事である。

真実を歩む人生の苦しさはここにある、これこそ真実なる苦であろう。この人間が背負わされた宿命こそ人間最大の苦にほかならないのである。人生においてその過程に起る苦しみ等、何と軽いものであろうと思わずにいられない。真実なる苦はここに存在している。この真実なる苦に対して何と多くの人が逃避している事か!!　ある者は悪意識の惰性の中に、ある者は意識的にこの人生の持つ絶体的苦に対して逃避を試みているのだ、人間だれしも背を向けたいし、又向けない人間は一人もいないに相違ない。しかし靱打って苦に対し立ち向ってこそ我々

は人間としての資格を得る、そしてそこから人世に覚醒し、その歩みに一歩を実質的に踏出すのだ、我々は真実を極め、正義に対して勇気を持ち人生を歩むことが根本であり、指導者の多くの人間が思想に対する研究には深入りを恐れ、又圧迫し、社会矛盾の追求に対してはそれが社会というものだと教え悟し、貧困にあえぐ者に対して物を与える事をお人好しと冷笑し、法を無視する者に対して無干渉を装い、暴力に対して君子危きに近寄らず等と、少なくともその様な傾向にあった事、事態が今日の社会矛盾を導いた事は誤りないところである。その原因こそが人間としての義務、すなわち人間性向上のための義務を怠ったからであり、人生に対する逃避的傾向が強かったという事にほかならない。個々の人間の自覚のもとに成立した社会こそが真の平和を得ると信じ人生への覚醒は人生の苦悩より始まるものと思う。人生への覚醒こそは人間個人の自覚を捉し世界市民としての世界平和に通ずるものと考え、且つ人間の最大限の満足はこの人生への覚醒から始まる人間性追求によって得られよう、我々はこの時、喜に立ち責任の重さに痛感されられよう、なんとなれば今迄の平和への追求の中で一番難かしく忍耐を必要とする方法しか方法のない、すなわち終極の平和と確保せねばならない時代に生れ存在しているからである。個人個人が人間性に自覚める事は、今や義務であり責任である。彼等一人一人の自覚めにより世界平和が導かれ、すべてあらゆる人種の人間性へのレベルが高度に達した時、各々の文化は融合され、世界は一つに団結し人間個人は芸術に、スポーツに科学に人間形成への追求に一生を満足なる充実なものになし得よう。我々はこの一端を担いこの世に存在する事を忘れてはならない、個々の人間追求こそが唯一つ世界平和への道である。悲しいかな各個人の人間性の向上が唯一の平和、世界平和に通ずる事を認識していない人間が現代には余りにも多い。又認識を持つ人間があっても、その実行に勇気の持てない事が多分にある。人間は自分自身と常に戦い続け、苦悩を続けて来ている、自己との戦いから逃れたい気持は解らぬでもない。しかし人間としてこの世に生命を持つ以上、権利と義務を有することは当然であり、その義務こそが一生涯自己と戦い抜く事にほかならない。そしてその中にこそ人間が出現以来求めて来た真実が見出せるのである。

私が永住するという伯国に対する志ざしは根本的には自分自身の一生の職業を農業に求め自己追求に人間形成を押し進める為である。それに付け加え伯国が次世の要素を有し、その責任を担っている事が私自身の伯国永住を

決意させるに至った、日本に於ても農業自営と人間追求はなし得る問題である。しかし日本における人間性主張、追求はこの乱立期に時期的マッチを欠いている、しかし遠からずして教育を初めとする世界の進路は人間性道徳を主体とする事は確定的である。

同じ感念を遂行するに二つの道がある。私はその一つを選択する事を先天的に身につけて来た様な感さえする。何の根拠もない、何の科学的根拠もない事だ、しかし私が人生の苦悩に挑まない事には私の子孫は皆勇気のない、誠意のない、真意のない人間に少なくともその傾向を持ってしまうような罪悪感さえ感ずる、つまらない事だ。非科学的な事かも知れない。しかしその様な事が信じられ感じられる私は幸せだと思う。

昭和三十八年一月十一日　記

根釧原野実習記

七月七日上野を発ち、根釧実習は八月十日迄、朝五時起床、晩七時半迄、苦しい毎日が続いた、今迄の実習が近郊もしくは実験農場が主であった為、今回の実習がいかに自分に大きく作用したかという事は、云うまでもない。又別な立場から云えば農業実習の最終的段階を試みたとも云える、用するに学問上の実習から実際農業の実習に踏み切り終止符を打たんともしたのであった。又犠牲の多い農業移住に疑問を生じ国内開拓の道を求めた事も事実であった。ともかくも根釧原野の実習が自分自身の歩むべく道を決断させてくれた事実は良く作用するにしろ、悪く作用するにしろ成果であったに相違ない。

昭和三十八年九月十七日　記

過去と未来の隙間に立ち

力行会南米開拓講所という寮に十一月入所した。そもそも私の行動には詳細な調査の基に行なわれたという事が皆無といってよい程ない、当所においても寮生活を営むという過程においても何ら思考する事なくして入所に至った、しかしことごとく私の無計画な行動は私を後悔にいたらしめる事なくすべて満足なる成果を得、促進して来た。

私の今日迄の道は複雑々多、何る本筋を握み得る事のない情熱発散への無軌道な道だった。移住という漠然とした目的らしきものを得、歩み出したその本質においては、決して移住思想というものを有し、必要に迫まられ、義務権利を感じ、私の生きるべき一つの道と解した訳でもない。他人の感ずると同様に広大な自然に外国というまだ見しらぬものへの好奇心に、憧れたまでの事だった。

根釧原野実習も又都下における養鶏、養豚実習も、あるいは土方をしたり、四国、九州を無銭旅行したりした事も、すべて移住に関する本質に触れ行なわれた行動ではなかった。しかしその行動も決して、今日移住の本質に触れんとしている状態において無意味であった訳ではない。それどころか現在こうして、私が移住の本質に漠然と触れるにあたり、いかに価値を有しているかという事は言葉につくせない。ともかくも私の今迄の無軌道な道において右横左横しながらも、一連の帯の中から無意識にも脱する事なく踏み込んで来られたという事は非常な幸運というよりない。私は二十代に入りこの春渡伯する事となったが、過去のすべてを生かし未来を造り上げるべく境地に立った。人生を三分に分けて考えてみるならば、私はその一部前半を終えたのであって、それを意識させられるべく行動が移住という形において行なわれ、第三段階をもこの様な形において行われる事と思われる。私は私の未来設計において述べても決してそれに責任を感ずるつもりは毛頭ない。

同時に未来を語り、行動が必ずしもそれに伴なわなくとも他人の批難を感ずる事もない。要はその目的に向って充分な力を発揮したか否かという事にある。すべての道において、目的達成はあくまでも、その過程の従に他ならない。私は第三段階における行動をアマゾンもしくはそれに相当する未開発地に求めている、私に課せられた仕事は教育事業であるが、奥地における理想郷建設という大きな仕事が出来ずとも、寺小屋式の教育であっても決して嘆くつもりはない。貧困に喘ぐとも私は決して人生における目的を失う事のない生活をしたく思う。サンパウロにおいては何年生活するか解らないが、聖市における目的は学校に学ぶ事にある。第三段階への為の第二段階に他ならない。

貧困な生活を私は少しも恐ろしいとは思わない。しかし貧困な生活を務めてさけようとする気持が起る事が恐ろしい。虚栄なる欲望の為に、

昭和三十九年一月一日記

以上で「日記」は終っている。文中に一路という言葉が出てくるが、彼はこの前私に手紙をくれる時の名前にこの一路という字が、書いてあった。彼自身、一路のごとく生きるのを望みそして異国の地に於いても真実一路のごとく生きぬいていってくれる事と私は信じている。

又、根釧原野実習には、私も一緒に参加し一ケ月寝食を共にしたが、彼自身、原野の開拓部落の人々の生活を見てそして一緒に働く、又近くにあるパイロットファーム開拓に勤だ農大の先輩の姿を発見して少なからず国内開拓

の道を求め迷ったのも事実であった。

移民船が横浜を出港して伯国サントスに着く迄約一ケ月半かかるから、まだ大半、洋上に居るに違いない。彼は今頃あの狭くるしい移民船の一室で何を考え、何をしている事だろうか……。

山の男が「そこに山があるから」と云って命をかけて山に登るがごとく、僕も「そこに若者をひきつける〝可能性の大地〟があるから」……と云って春雨にけむる夕方の横浜の港を去っていった彼の顔が浮んでくる……。

狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きくその道は広い。

そして、そこからはいって行く者が多い。

命にいたる門は狭くその道は細い。

そして、それを見出す者が少ない。

＝先輩よりの寄稿＝

未来の人間性

（三十九年度卒）　小野竹一

未来の「人間性」遠い時代の眼で今の時代をながめる時、私は現代の人間に見い出す一番風変りなものは、「歴史的感覚」と呼ばれる現代人特有の美徳、現代人特有の病気である。これは歴史上まったく新しい或るもの、全く未知の或るものえの発端なのだが、目下のところまだ貧寒をきわめている為、多くの人々はそれによって、さながら寒気におそわれでもしたように、かえって自分が一層貧しく、一層寒々とするばかりなのだ。

また別の人達には、この歴史的感覚は、しのび寄る老年の徴候と思われている。

そして我々の遊星は、この種の人達には、現在を忘れる為に自分の若い時の話を書きとめる憂鬱な病人さながらに見えるのである。事実これこそ、この新しい感情の一つの色合いなのだ。人間の歴史全体を自分の歴史として感ずることのできる者は、病床で健康に思いをはせる病人の悲しみ、遠い青春の夢をしのぶ、人の悲しみ、老

若男女恋人をうばわれた愛する者の悲しみ、宗教家で理想が地に沈んだ殉教者の悲しみ、戦斗で勝敗の結着がつかなかったのに、みずからは傷つき、友をも失うに至った、戦いの夕べに於ける英雄の悲しみを感ずるのである。

しかし、このあらゆる種類の悲しみの巨大な総計を忍び、これに堪えることができ、しかもなお英雄であること、戦いの第二日があけそめるに当って暁光に会釈を乞う。自分の運命に喜んで挨拶することの出来る英雄であること、自分の前に、自分の後に、数千年の視野をもった人間として、過ぎ去ったすべての精神のあらゆる高貴を相続した後継として、古代の貴族のうちで最も身分の高い者、しかも同時に、その類のものをどのような時代もかって見たことも夢みたこともないような新しい貴族の子として立つこと。

人類の最も古いものも最も新しいものも、人類のあらゆる損失と希望も、征服と勝利もわが心一つにおさめ、ひとつの感情に押し入れること、これはきっと、これまでの人間が知らなかった幸福を生み出すに違いあるまい。

力と愛に満ちた、涙と哄笑にあふれた神の幸福。それは夕べの太陽のように、たえずその無尽蔵の富から贈物をほどこし、海へそそぎこむような幸福だ、太陽と同じく、最も貧しい漁夫さえ黄金の櫂でこぐとき、そこに初めて最も豊な自分を感ずるといった幸福なのだ。あの夢の中にある大感そのものなのだ。じっと眺めよ、じっと見つめよ、そしてとらえよ、そしてなでて包みに気を配りながら、中味を正しい認識のもとに開けよと、こう私は言いたい、こうした神々しい感じの、真のままこそ、わたしは呼びたい ― 人間性と。

知識的であるものの見方の日記から



随想

牛乳の風味

講師　山中良忠

のらりくらりとついでに生きている様な私でも、時々こんな風に考える。

いかに栄養価のすぐれた食品であっても、その風味が悪かったらまず喜んでたべる人は少ないであろう、それ程に食品の風味と云うものは大切なものである。

新鮮な牛乳には快よい風味がある、その香りを化学的に分解すると硫化メチルがその主となっているものの様であるがこの清潔な快よい動物性のタッチが我々に親和感を抱かせるのである。……そんな香りを人間の香りとして常々もっていたいものだ。ただ牛乳を長い間加熱すると加熱臭が生じて来る。俗に云う〝香ばしさ〟がそれであるが、それを牛乳の風味と思っている人が意外に多い。これは Cooked flavor と云ってアメリカでは最も嫌われているものである。日本では〝牛乳らしい風味〟と云って今日でも一部の人達には案外好まれている様である。こんな誤った考え方は、今すぐにでも除かなくてはなるまい。人間の香りも同じであって人をそんな見方しかできない人こそまことになさけない限りである。

牛乳の甘味は乳糖であり、苦味はマグネシウム及びカルシウムにより、酸味はクエン酸及び燐酸により、鹸味は塩素によるものであると云う、およそ食品の味は甘、苦、酸、鹸の四つの単位から出来ているのであり、真の美味と云うのは、これらの味が混然ととけあった時に生ずるものであると云われる、とすれば、牛乳の味はまことに美味と云うほかない、あっさりして健て〝香ばしさ〟などと云うものはないが本当であって、いくら飲んでも飲みあきない味なのである、こんな味のある人間になりたいものだ……牛乳の風味に関係あるものとして大切な成分に揮発性水溶性低級脂肪酸からなる乳脂肪、遊離アミノ酸、レミチン等があって、これらの成分はいわゆる〝こく〟のある風味を生ずるものである、人間の〝こく〟……これこそ……賢明な諸兄のお考え載きたい所である。

さて、牛乳の味をこわすものに、飼料臭、不潔臭、敗油臭、酸化臭等いろいろある、不飽和アルデヒド類のまずい味、金属イオンからおこる金属臭の収欠性もいやなものである、― 牛乳が日光に強くあたると〝ひなたくささ〟が出て来る、リボフラ

ビンの存在で、牛乳中のメチオニンから光分解でメチオメールを生ずるためであると云う、日光照射による風味の悪変は牛乳を紙製容器に入れると完全に防ぐことが出来ると云う人もある。

進んだ技術者たちは、しぼった牛乳の新鮮さ、その成分と風味に出来るだけ変化を与えない様に細心の注意をはらって、貴い自然のナマの風味を求めているのである、人の風味をこわすものは何んであろうか……いわゆる〝こく〟のある風味豊かな真の美味の人間が出来るのではないだろうか……そうありたいものである。……

友への雑文

講師　伊藤澄麿

原稿用紙を前にチンザノをなめたり、桃山を揉んだりしていたら急に君に手紙を書き度くなった。深夜放送が妙に悩しく聞える夜に、もうじき三月が来る。（あたり前だ）、しかし今年の三月は我々にとってやゝメモリアルな三月だ。そう卒業十週年に当る。早いものだ。月日の脚は速過ぎる様だ。

達者の事と思う。私共も元気で居る、妻は大分老けたが娘は小学校に行き生意気になった。風のウワサに依ると貴君はウルトラグラマーの奥方と密月の日々をお送りとか、素晴しい事だ、家庭第一主義と云うものは。ツトメなんて云ふものは失敗して二三度首になったって屁とも思わんだろうが奥方から首になったらスペアなしでバンクした様なものだ。……第一主義に乾杯する。三十男のイヤらしさだ。その点私は大変幸と思って居る。三年前母校へ帰ってからは若い衆と毎日暮せるからだ。彼等の明るさと可能性は年令とそれに纏わるインフェリをとばして呉れるからだ。畜産学科そりゃ変った。設備から見れば古い茂原は学校とは云えなかった。今各専攻に分かれた研究室の一教室の半分にも満たないものであったろう。兎に角、豊かな感触に近くなりつつあるな。学生は夢を持ち入学して来て居る。入学早々のグリーンボーイが「将来製造方面に進みます」「育種学を勉強して孵化業をいたします。等々立派に答えるのだ、或る方向づけられたものを持っている事だ。「西部のカーボーイ」と答えるドリーマーは居ない。〝what I shall do〟私達はこの言葉をはき、そしてこれに〝四年間悩まされたわけだ。結局、〝Life is too short to be little〟なる言葉をその日その時に、勝手に解釈して寝に就いた毎日だった。貧しい毎日だったな。しかし今は良い

世代だ、皆フトコロ具合は兎も角として豊かだ、研究室近辺をウロウロ出入して居る連中は活気に満ちて居る。一応紳士然となっている。小ぎれいな学生に変って来ている。バンカラは遺物となった。女子学生が多くなった結果でもなかろう。昼休み放課後の中庭は華やかだ。昔はヨーカン一色だったが色取り取りの女子学生で花園の様だ。顔は別に分らぬが。しかし男子は中々立派であり異性に対し極めて自然であり一見ナイト風とも見られる。松林の中を下草刈のオバサンが見えるといって大声でさわぎ小学生が通ったと云っては奇声を発していた貴君では四年間は務らない。考えて見ると四年間は短かかったな。自然科学の発達して居る今日それら吸収し尚一般教養をみっちりし込まれる現在の学生は容易でない事は事実だ。しかし彼等が一応一教程終えて卒業する時私はたまらない嬉しさを感じる訳だ。書頭に云った幸福感が再び起る。同業者、畜産屋が増える事だ。会者常離の理も知って居るつもりだ。しかし心の連りには常離の理は別時元のものだと想う。そろそろ眠くなった。再会の時は昔に帰って飲み明す事としよう。

小雪が遠くのラジオのノクターンを運ぶ夜に。

何かが欠けている

助教授　一戸健司

「何かが欠けているな。」君達の卒論発表会をきゝながら私は寂しい気持にとらわれた。内容がどんなに乏しくても、たとえその表現方法が未熟であっても、発表しろと、きめられた事は守るべきではあるまいか。そして四年間の学生生活に最後のしめくゝりをすべきではないだろうか。

私の場合、昨年は五名、今年は七名、小人数ではあるが兎に角規定通り全員に発表をさせて来た。或る人は「人数が少いから徹底するのだ。」と言うかも知れない。然し私にも私なりの言い分はある。研究室の形態が整ってから僅か一年、然も器具も満足にない上に未熟な私が雑事に追われながら指導したとしても、至らぬ事はもとより明白な事、然し、きめられた事は守るべきだと信じて実行して来た。今年も「僕にはとても自信がないから発表は許してほしい。この論文では恥ずかしいから当日は休む」と幾度も頼みに来た学生もいた。然し私はその都度、「たとえそれがどんなに貧弱な内容のものであっても、それが私達の現状で出来る最善のものであるならば潔よく発表すべきだ。こそこそ休む様なけちな根性を出すな。」と言い続けて来た。

事実、恥ずかしくて発表出来ない様な論文しか書けない様な者に対しては、私は断呼として「不可」をつける積りであった。

学生生活の最後の成算である卒論の発表会を〝無関心に休んだ様な連中は、一体四年間何を考えて来たのであろうか。おそらく「何んとかなる。」と言う例の他力本願な気持で、現実から逃避し続けて来たのではあるまいか。

私は事あるごとに再試験や実験実習の補講には、反対し続けて来た。君達は大学生である以上、自己の行動に対する自覚と反省がある筈である。各自が最善を尽しても到達し得ない場合に於てのみ、これ等の制度が真の恩恵としての価値が生ずるもの。それをいゝ事にしてただダラダラと日を送っている現状では、この恩恵はかえって君達をたゞスポイルする事にはなるまいか。そのために先生方は幾度となく貴重な時間を奪われて勉学に励む時間もなくなり、又心ある学生達の向学心も減退しまいかと危惧の念をいだくのは、私一人ではないと思う。

現状に不満を持つ事はよい事、然しその不満をたゞ自己の現実の姿と切り放し、その怠慢に対する逃避的手段としている間は、いつ迄たっても進歩はなく、解決の見通しすらたゝない事を心から強調したい。

心ある学生諸君にとっては全く失礼だと思いながらも敢えて一筆した次第である。

離島の悩み

講師　田中一栄

鹿児島から約一五〇粁の南方海上に点々と浮ぶ小島がある。すなわち竹島、硫黄島および黒島で、これを併せて三島村と呼ぶ。島の廻りは絶壁に囲まれて山肌は岩石多く表土が浅い。また平地はほとんどなく、従って港湾らしきものもないので海岸からハシケを出して沖に停泊中の定期船と連絡する。現在就航している村有の第2三幸丸（一〇一トン）が唯一の定期船で、四～五日目に一往復するだけである。これも天候順調な場合のことで、一旦不順となれば島は全く孤立の状態になる。昨年の夏に在来家畜調査のため、三島村に渡る機会を得て丁度一週間黒島に滞在した。御存じの方もあるかと思うが、有吉佐和子氏の著書「忘れられた島」のモデルはこの黒島である。

黒島には大里および片泊と云う二つの部落が島の東西に位し、その間約一〇粁の山道で結ばれている。島民の生活水準は極めて低く、猫の額ほどの耕地から穫れる甘藷と麦が主食であり、魚業も四面海に囲まれながら港湾および船舶の不備で成り立たず、わずか岸釣により自給を賄っている。幸に水に恵まれたこの島は、繁茂する竹の伐採により現金収入を得て食糧および日用品を贖ない、また和牛の育成・繁殖による畜産的経営の気運が見られつゝあり、現在では、黒毛和種が約三〇〇頭放育されている。

一方、自家発電所の設置、簡易水道の施設、診療所の建設と除々に生活が向上されているが、せっかくできた、診療所に来てくれる医者がいないと云うことは、島民にとって重大な問題である。内地の交通不便な寒村にもまだまだ無医村はあるが、離島の場合は天候次第で何週間も外部と交通の杜絶える可能性は高い。しかし一般に健康なのか、或いは一種の諦めなのかは知らないが、さほど気にも留めていない様である。それよりも島民にとってはもっと重大で且つ深刻な悩みがある。

現在西部落にはそれぞれ小・中学併校があり、生徒数も約一五〇名居るが、義務教育が終って中学を卒業する場合、進学者はほとんどなく全員内地に就職してしまい、島に残る者は一人も居ないのが現状である。従って現在の人口構成は十五才までと三十才以上であり、いわゆる結婚適令期の世代に欠けている。このままでは人口の減少して行くのは明らかであり、事実、学校の生徒数も年々減っている。この様なことが島民の建設的な意欲を大きく阻んでいるのは辞めないであろう。

学校の先生方の中には、いづれは内地に転任することを期待して家族と別居されている方もあるが、しかし大里の学校で非常に若い先生の居ることに気付いた。そして彼女はこの島出身の数少ない先生であり、僻地の教育に専念すべく進んで母校に奉職しているのを聞き及んで、大いに心温まる思いに駆られたのは一人私のみではなかろう。彼女に万頼の拍手を送ると共に、はるかなる島の人々に祝福あらんことを祈る。

駆けだし

助手　近江弘明

「かけだし」此の言葉は、人間誰しも如何なる職につこうが、一度は耳にするものである。私も、六年間の学生々活を昨年の三月で終え、四月より本学に席を置きましたので、社会人と云っても未だ一年に満たぬ新参者です。今春も多くの卒業生が、それぞれの職場に向い、大学で学び得た専門技術をいかし、大いにハッスルされるだろうが、そこに表われる成績は必ずしも成功と云う文字ではなく失敗の連続であろう。しかし、

失敗こそ将来の成功をうみだす基礎となるのではなかろうか。さすれば、若いうちの失敗は人間形成の大きな原動力ともなるはずである。とかく、若者の失敗を見ると「此の駆けだし者が」と嘲笑うのが老兵の常で、時には助言すら与えてもらえず、参考意見等は勿論、問題にされないこともあろう。しかし、ここで挫けては「口先だけの無能力者」と再度笑われ、栄達のない寂しい人生ともなりかねない。だが、此の失敗は他人そして自分にも、充分に納得の適うものでなくてはならず、故に社会人となっても平素の勉学は決して怠ってはなるまい。まして、我々の職性は特殊の技術が要求されるため、豊富な知識と経験を身につけることが大切である。他人から、新参者よ、駆けだし者よと云われる前に、自分自身の心にきざみ、如何なる仕事にも差別をつけず、沢山の好成績を上げられる様、切望致します。亦、世間には数多くの職業が有り、そこに従事する人にも、学歴、その他の点で一様でないことは云う迄もなく周知のことと思う。しかし、ここで考えて頂きたいことは、職業は勿論、人間が人間を批判、中傷すると云うことです。「自分は大学卒だ」と自信を持つことは良いが、これが過剰になると種々の誤解を招く様になる。云い返れば、職業や学歴で物事を解釈せぬことです。世間一般に、又、私もそうでしたが、人の余り好まぬ職業とか、学歴の関係しない様な仕事を持つ人には、動もすれば〝シロイ眼〟見がちです。これが職業上の義務からの批判なら、やもうえないでしょうが……。何れにせよ、お互い今後此の様な気持は捨て、希望ある自己の道を信念と努力をもって歩み続けましょう。

インド古代美術展を鑑て

畜三　田中牧生

五千年の長い伝統と歴史を持つインド、インドはアジアの精神の本流であり、日本の仏教美術の母親である。このインド美術はインダス河流域で発生した「インダス文明」から始まった。その頃一時インド全土を風靡した仏教は超民族的な勢で他のアジア諸国に広まり、そのけんらんたる美術も中国を経て、我国の飛鳥時代、天平時代の仏教美術に大なる影響を与えたのである。古代インドに於いて仏教美術が始まったのは釈迦の入滅せられたとき、（BC四八六年）に舎利を八分して八つの仏塔が造立され、その神聖なる仏塔の周囲にめぐらした玉垣にいろいろ彫刻を施したことだといわれている。その後、インダス文明が北部から浸入

したアーリア民族の手で滅ぼされ、ヒンズー教の文化となる。インドといえば我々は「花まつり」のときのお釈迦様を想像し、仏教の発祥地、仏教国と考えがちである。それは我国が仏教系である事からも仕方のない事であろう。私も現に、その様な先入観にとらわれていた一人であるが、こんどの大展覧会を鑑てもわかる様にヒンズー教の勢力の強さをまざまざと見せつけられ、インド美術の認識を改めねばならぬ事を痛感した。私はインド展を鑑るまで、どうせ広隆寺にある半跏思惟像、飛鳥寺の大仏、夢殿観音の様な菩薩像や観音像寺があの独特のポーズで、お客に相対して整列しているのかと思った。これは全くの無知からくる誤解であった。大体東洋的な美術に対する何か親類の様な無意識な親しみやすさと、異性に対する一種の魅力にでも取りつかれた気持で、インド展へ足を向けてしまったので、別に大して期待と興味はいだいていなかった。予想はまるで違った。見るものに目を奪われた。アシューカ王石柱等の芸術の崇高さと数の豊富な仏教美術もすばらしかったが、中でも一番印象的なのは、ヒンズー教彫刻、それもヤクシ像や母神像の全裸の女性像である。「婦人トルソー」、「母と子」、「鏡を見る女」、「樹の精」、「女と鳥」、「化粧する婦人」、「楽器をもつ女」、彼女等は皆動的で、複雑微妙なポーズをとり、盛り上ったくりくりした巨大な乳房、キュとひきしまった腰、そして再び急に拡大する偉大な肉感的な腰部からの曲線の連続、ふくよかな肢体、それらは肉の塊であり、生命の塊である。精力的であり、情熱的である。性的であり、官能的である。まさに呼吸し、脈打ち、躍動した生命の血が流れて、温かみを感ずる。三人のヤクシ像を見た。彼女等は生きている悦びに満ちた明かるい顔付をし、開放的で、その自由のポーズと豊満な肉体からは若々しい女の体臭がする。それは生そのものに他ならない。次に母と子を見た。母は子供の横に寝て、子供に巨大な乳房から乳を与えている。子供は右手でそっと母の乳房に手をあて目をつむって静かに彼女の乳を吸っている。いや彼女の豊満な肉体から湧きいづる生命を吸っている。子供はただ乳を受けること生命を受けることしか知らない。与える事を知らない。だが母親は一生県命に乳を、生命を子供に与える。これ程美しい母性愛があろうか。彼女の愛に包まれて子供は大きく成長する事だろう。この様な彫刻は日本や中国の仏教世界では想像もつかない事であろう。まして「ミトウナ」や「龍と龍女」の様な男女の結合の姿に到っては、これでも宗教かという観

が強く感じられた。この官能性は女性の肉体にひそむ生命の生産性、創造性の神化と解釈出来ると思う。このヒンズー教彫刻の官能的な場面を通して、母性愛にしろ、一般の愛というものを考えてみた。結局、愛というものは与える事だと思う。与える事によって、相手に積極的に働きかけることによって、相手を成長させる事、これが愛だと思う。では何を与えるか、それは生きた生命、何も生理的な生命ではない、言葉、思想、趣味、何んでも良い。一般に男女の愛の究極的な段階である結合の姿を神的なものの最高の発現とみるヒンズー教的な造形表現は明かるく、開放的で、楽観的で、愉快に感ずるのである。ヒンズー教は仏教より古く、広範囲である。仏教は十三世紀で姿を消したのにヒンズー教は現代まで継続し、絶対的勢力を誇り、インド人の物心両面の生活に深く根ざしている。現に「カースト制度」という激しい階級区別がヒンズー教と密接なつながりをもち、宗教上、不合理と矛盾に満ち満ちている事実を考えなければならない。又、インド展を通してインド美術ならびにインド連邦に対する過去、現代の認識を改める絶好の機会を得た事は幸だと思う。



農村に於ける恋愛と結婚

畜産四年　栗原良雄

日本の青年、男女の物事の考え方は戦争により日本の敗戦によって西欧特にアメリカの文化の影響でだいぶ変ってきた。しかし都会に比べれば農村はまだまだ影響力は少なかった。しかし現在ではマスコミの発展で新しい文化が農村のすみずみまで行きわたり、目には見えないけれど除々に変化している。

恋愛と結婚についても同様な事が言える。だが、まだまだ古い風習があちらこちらに残っている。それも昔ほどではなくなっている。農村には青年会というのがあり若い男女が真剣になって農村の種々の問題に取り組んだり、レクリエーションを行ったりして若いエネルギーを発散させている。この様に若い男女が一諸になって活動していれば自然恋愛という問題が起ってくるのは当然である。だが互に好だと思っていても実際には二人だけで話をしたり、映画を見に行ったりすれば交際範囲の狭い農村であるから「どこそこの息子と娘が……」と言うようなあらぬ噂がたち人から人へと伝わる内にその噂がとんでもない噂になってしまうだけでなく、その本人の前では何も言わないが陰でいらぬ事をお茶のみ話にする。この様に陰でこそこそ噂をされたり、変な目付きで見られたりすれば互に好きなのだが自然と遠ざかるようになり、当人の両親もあまり変な噂がたつのでは世間様に顔がたたないというので交際を無理矢理やめさせてしまう。又、互に好きであっても、あの家とは親代々が仲が悪いからその家の娘とつき合ってはいけないとか、あの家は昔雇い人だったから身分がちがう等、周囲のあらぬ噂、両親に反対されたりして自由な交際ができないことが多い。でもこの様な事は他の社会にも多かれ少なかれあるが、特に農村ほどではないだろう。

又、結婚についても、恋愛が自由にできないとなれば自然親の決めた嫁をもらうことになる。しかし、この結婚も農村に於いては、嫁入りとか嫁取りとかいう言葉で呼ばれてきた。嫁とはむろん女の方で、この言い方では、男は問題にされていない。

嫁と呼ばれる女をやり取りするので、今でもこの古い風習は地方に残っている。

関東のある地方で、「足いれ結婚」という風習が残っている。嫁にもらう前に一ケ月間位家で仕事をさせて親が気に入れば家風にあうと言って結婚式をして籍を入れ

るが、親の気に入らなければ家風にあわないと言って親元にかえしてしまう風習がまだ残っている。これなどは明らかに嫁を労働力と考えられ、まるで牛馬と同様であるから嫁は家の嫁であって息子の嫁ではないのである。

この様に戦前の農村は恋愛にしろ結婚にしろ自由でなく、農村の青年はその環境に矛盾を感じながらもそれを打破ることが出来ず一生涯連れ添ふ女房を決める自分の結婚について一切親にまかせ親のいいなりになるのが親孝行だとされていた。しかし、今ではそれらの考えはだんだんと遠い昔話になろうとしているがまだまだ地方では多少なりともいろいろな形で残っている。

結婚はまず愛情と理解とによってむすばれた男女が結婚することにより新しく夫となり妻となる。そして夫婦が一致して幸福な生活を築きあげることが結婚の第一の目的である。だから結婚は親の問題ではなく本人自身の問題であるから根本は愛情と理解である。そして古い秩序の中では、結婚の第一の目的は夫婦で幸福な生活を築くのでなく、それよりはその家の血筋を受けたあととり息子を作る方が大切と考えられ、先祖代々の田畑、財産を守ることが結婚の第一の目的だった。だから結婚して三年間子供が産れなければその婦人がいかにすぐれた妻であろうとも、又互に深い愛情で結ばれていようとも親の一方的な考えで結婚が解消となり、それに従うのが正しいとされた。又子供が産れなければ嫁を追い出すこともあったが嫁の家では文句は言えなかった。実際に、子供が生れたとしても家族内での嫁の地位は低く、嫁は家族より早く起きて、朝暗いうちから朝食の準備をして、家族の者が全部食べ終ってから食事をし、家族が休んでいる内に跡かたずけ、子供の世話をして休む間もなく仕事で、夜も疲れた体で夕食の準備をしなければならず風呂も一番最後でないと入れない。寝るのも一番最後である。この様に嫁は労働力として考えられてきた。しかし戦後は古い家の秩序から人間の解放はひとりひとりの人間を独立した個人として尊重することを土台にしている。

現代の結婚は人間としての幸福を目的として、嫁入りとか嫁取りという考え方は過去のものとして、家のため、親のためでなく自分達夫婦の幸福を築いていくためである。

家庭の絶対単位は夫婦であるから住居の構造も、家族個人の生活が尊重され、夫婦が気がねしないでよい私生活の方向へ改善されていかなければならない。

結婚というものが体温の通ったものとして人間の幸福を目的とした生活のいとなみなら、十年、二十年、三十年、四十年たとうとも夫婦の理解と愛情のむすびつきは

ますます深くなっていかなければならないと思う。

特に最近、都会、農村をとわず恋愛は恋愛、結婚は結婚という考えが多くなり、遊び半分の恋愛が多くなってきた。これが真の恋愛といえるかどうかは疑問がある。恋愛は恋愛結婚は結婚という考え方は、恋愛を単なる享楽としか考えていないことである。愛する事は生涯の結合を求め願うところに真実があり、その恋愛は結婚により完成する。結婚を願わない恋愛は恋愛でなく遊びにすぎない。

恋愛は一生に一度のものかというと、そうは思わない。人生における恋愛の数は決められるものではない。中には一瞬の火花にすぎないものもあるだろうし、立ち消えになるものもあるだろうが幾度か経験することにより次第にあやまらない判断を身につけるようになるだろう。しかし恋愛は結婚という前提のもとで許されるということが大切である。結婚は、愛情によって結すばれることは言うまでもないが、悪情だけで他の条件を無視してどんな困難をも克服できる力をもっているとは思わない。結婚することは、二人が生きていかなければならないから愛情だけで生活していけない場合もある。だから、結婚するだけの愛情が生れてきたらまず結婚という生活が出来るかどうかあらゆる面から検討する事が必要である。

困難な問題はごまかさないで一つ一つの困難をいかに乗り切っていくか、又乗り切れるかを冷静に考えて、非常に無理がある場合には、その恋愛を結婚までおし進めるのを断念すべきである。特に交際範囲の狭い農村などで生れる恋愛の中で不安のある近親結婚などは苦しいけれどもあきらめなければならない場合もある。

農村に身をおいている青年男子は、農村人と生きていくには、農業生産が土台であるから農業生産への関心と探究、それに自覚と誇りと力を身につけることである。ところが娘たちは結婚すれば農業は共稼ぎの仕事にもかかわらず、農業生産への関心よりも料理や洋和裁の技術を身につけることの方を結婚の準備と考えている。だがそれらを悪いとは言わないが、これからは女の人も農業生産へのつよい関心をもち夫のかげがえのない協力者になっていこうとする心がけが必要であると思う。

恋愛にしても農村に於いて青年、女子は、前にも書いたような環境に負けないでもっと正々堂々と異性と交際し、それが真の恋愛なら親達を納得させ、親達もその恋愛が適当と認めたなら、息子、娘等を信頼し、もっと寛大な気持で見守ってやり結婚に導いてやるべきである。そして将来の農村を明るく、住みよい農村にしたいものである。

「農村青年と女性の生き方」

英語雑感

畜産四年　町田　尚

今日、英語が世界中のあらゆる部面ではたす役割、意義を考えた場合いかなるものであるかは、現代に生きる人である以上容易に理解できると思う。

まず最初に世界地図を頭の中に映像してみると、英語を母国語とする人は主として北米合衆国に住み、イギリス、アイルランド、又イギリス海外自治領と植民地等に住み、その数は大体約二億三千万人位と推定されている。又英語を第二外国語、あるいは補助語として使う人々の数は五千万人から一億二千五百万人と推定されている。このように数の上から見ると英語を使用する人の数は世界人口の七分の一位に達している様子である。そして英語による伝達の範囲、地理的分布となるとまさに、今日世界語に近いということになりそうです。ということは又、世界があまりに狭くなったという感じを受けるわけです。我国も年々いろいろと開放的になりつつある今日、よく心を落ちつけて考えてみると、開放的になり、そして学問の探究が進み、それに伴ってあらゆる部門が発達して行くならば外国語、特に英語に対する関心も高まって行くのではないでしょうか。しかしこれを知らねば生活できないという意義をもつ手段でもない由、痛切に感ずるのは〝限られた人〟となるかも知れない。

ところで我々大学に学ぶ学生の英語に対する見解はどうであろうか。人によって意見は違うかも知れないが、私の考えは〝限られた人〟の中に入らなければならない性質のものであると断定する。日本の国の一学生として考えた場合、学問をすればするほどそのような気持になるのではなかろうか。

ところで我国ではどのようにして英語が存在し、今日どんな場所で、どんな風に使用されているかちょっとながめてみることにする。

まず日本に英語が導入されたのは一八五三年にペリー提督のひきいる、いわゆる「黒船」の入港にはじまり、それより日米文化交流等を通じ、特に教育の面で、一八七三年にダビッド・マリー、一八七七年に来日し動物学、人類学、考古学を紹介したエドワード・モーズ、ヘボン式ローマ字で有名なJ・C・ヘボン等が貴重な伝達者でないかと思う。我国では福沢諭吉、新島襄のような先覚者達が貴重な貢献をしたのである。さぞ彼等は現在の我々の様な安易な気持ではいられなかったろうとこの原稿を書きながらも深く感

心するものである。そして終戦後十八年たった今日では、特に日本とアメリカとの交流は急激に発展し、フルブライト計画やその他の多くの団体の主催する人物交流、資料の交換、芸術の交流、市民間の交流等があり、しかしそこで言うまでもなく直面する問題として言葉という欠くべからざる道具が必要であり、英語教育の進展も急テンポで進んだのである。

次に身近なところに振り返ってみると、私が最初に英語に接したのは小学校の頃で、それは張面の表紙に書いてある〝NoteBook〟である。それもローマ字を習いはじめで〝ノテボーグ〟と読んだものだ。それ以後中学で三年間、これは教材であるのでしかたなく、又高校入試のために頭の中につめ込んだものだ。その後高校で三年間、この時も単位をもらうため、大学入試のためにと学習したが、これらは教材で、日常一般社会の中に入ると、これは種々様々である。新聞、ラジオ、テレビなどで見、聞き、又書物、広告、商品の名前、機械、スポーツ用語、日用品、雑貨類、道路標識に至るまであらゆる所で英語は顔をのぞかせている。又反面、これでは使いすぎやしないか、横文字を並べさえすればいい気持になっていると思える使い方もかなり多く見当る。又最近、英会話、日用用語など、学校、会社、家庭で多くの人々に勉強され、利用されている。会話は、ここ二、三年間オリンピック主催国として会話ブームごときものが広まった。オリンピック・ムーブメントの影響する効果はスゴイもので開催国は急に発展するものである。我国も外国人が見るところ、ハイウエーの建設等〝再建〟に近い仕事をしていると言っている。それにしても英会話という、会話熱を起させただけでも非常な我国の利益であると思う。日常用語としては今や勝手な和製英語を造るに至っている。例えば、B・G英語ではoffice, girlと呼ぶのだそうです（あまり使わない）もっとも英米では、既婚者やold missがかなり多いとのこと、O・Gなんていう言葉は流行しないわけだ、Oldmaidと言えば日本ではこれをOldmissと勝手に作っている、又icecandy正しくはpopsicle, tablespeech正しくはafter dinner等と異様に思われるとのこと、chrismas cakeも和製英語で、こんな菓子はどこに行ってもないそうです。そこで考えるに我々は現地の現実を無視して英語を習い、又教えている人もいるのではないか、これでは又こまる、従って我々は出来るだけ正確な英語の知識を吸収しようではないか、一方畜産学科の二年生としては英語だけは落せない科目である。もし落したならば……。これだけ見てもその重

要性は理解できよう。

進　む

畜産三年　大賀四郎

東京と云う巨大なこの雑音の町で、我々は日々を、巨大な大木の白蟻の如く黙々と、送っている。その中で種々色々な人々が、人生をいかに生くべきかを考えている。我々若人は、若い力に燃え、人生の真とは何か、この世に生まれ人間は何をすべきか、又どう進むべきかを、老人、主婦も又同様考えるのであろう。私も同様、真の道は、誰にも迷惑をかけず、拘束されず、自分の意志に基く道を進む事である。この事は正しい。若人は夢を持たねばならぬ。未来の自分を築く為に、日本のこの発展し発達した日本に於いて、或る人々は自分の夢に向って全力、前進し、或る人々は現実の障害の中に夢を見失い、毎日を虚無感に浸って生活している。人間の創造主は平等でなかった様だ。体力にも、知能にも又経済力にも、経済力と書くと資本主義に無知な奴と言う人もあるだろうが、私は世界に、日本に又個人にも運命と言う物があると考えざるを得ない、夢に前進したくともそれをすれば、人間としての本能を又生活を築く事が出来ぬ、この様な人々は毎日交通事故で死ぬ人と同様な運命にあるとしか言えぬ、僕は運命論者かも知れないが、しかし、幾ら社会が良くなっても運はある。私は運命という物をこの人々の口実にしようとなぞ思っていない。確かに運は努力して選ぶものだ、運の無い者は現実と照らし合わせて、自分の進む道を努力、前進すれば良い。我々は若人故に、非現実的な夢を追いがちである。そして、毎日を平凡に送る大人達に歯痒さを感ずる。しかし、彼等大人も我々同様若い時には夢を持っていた、今も持っているだろうが。我々はこれ等先輩の言う事や人生観は素直に受け入れられぬ、しかし先輩の言う事は高次元から、経験者から見た真理である。この事から、子の人生を自由にやりたいままにさせるのは間違っている。何事も一からするのは大変な事である。我々は畜産の事をやるにも、先輩の書いた専門書を読む、この事は人生に於いても同様である、全て模倣だから故に大人は父として母として又経験者として若人に忠告を与えるべきだ、納得のいく様に。若人も自分の考えが正しいと思っても、高次元から見た時にそおは行かない事がある、だからと言って鵜呑にせよと言うのではない、自分で消化吸収すべきだ。そおしないと、夢を追って自分の人生に破局をもたらす。先輩の言の事を素直にとれる人は幸福だ。運の良い者は運をうまく利用して、自分の進む道を進めばよい。私は運を考えると神を考えざるを得ない。今迄、若気の為か、神を考えなかった。自分が何かとっつきにくかった神に興味が湧いて来るのが不思議である。

母との話し

畜産三年　遠矢東明

I（僕）「母さん、俺、将来自営したいな」
M（母）「資本はどうするの。家ではだせないよ」
I「学校卒業して、二年位勤めて資本をつくるよ」
M「バカダネー！　そんな二年位で、オイソレと金が出来るわけないでしょう。それに成功するかしないかわからないようなことに手を出すよりさ、着実な安定した生活のほうがずっと幸福になれるというもんだよ」
I「そう、まあ金は二年間でだめなら、期限のばしてつくることは出来るぜ」
M「やって成功出来る自信は、今は人手不足だし、中小企業から大企業へと移ろうとしているしさ」
I「でもね、養豚というものは、大企業も中小企業も大差はないと思うな。要は、周期的にくる価格変動さえのりきることの出来る資本でやってゆけばいいんだと思うけど。人手には、施設や精神薄弱児の少年の中でさ、動物が好で、豚でもいいという人がいたら一諸に暮したいな、それでその少年達が勉強したいなら学校も出来るだけ行かせてやりたいしさ」
M「それは理想だよ。いいかい、世の中はお前のためのものじゃないんだよ。だからお前の思っている通りに事ははこばないよ」
I「ああ、金があったらなあ」
M「金があったら、金があったらというけれどね。お前さんが理想を追う中に不安を感じ、その不安の全てを金になすりつけているんじゃないの」
I「チェ、痛いところつくな。でもね、母さん、俺、やれる自信あるよ。事実そうやって成功している人がいるんだもん。そりゃ同じ人間仲間でも頭の良し悪しとか色々違うかも知れないけれど、やった人がいる限り不可能でないことはたしかだと思うさ」
M「若いうちはいいね。そうやって社会のほんの一部分だけを見てきて自分の理想をのばそうとしているんだから、それにふずいする色々な困難があるのも

知らないで。そういう困難をも乗り越えて成功する自信あるかい」

I「それはなんとも言えない。でも、それを乗り越えてやりたい」

M「……」

とまあ、こんな話です。

僕はこの中に母の愛を感じたのです。それは常に感じていたものかも知れません。しかし、いままでは母の愛が盲目的であるという先入観念を持ち合せていた僕は、母がこれだけ僕のことを考えてからの反対であったことを知ると頭の下る思いでした。しかし、あと一歩その愛の足を進めて、僕の本当の幸福は自営にあるのだし、その自営の中で苦しみながらも自分で進んで入った道を一生懸命に歩んでいる僕と、母の言うサラリーマンの生活で張りのない生活を送っている僕とを母が見た時、母は、きっと前者の僕を見ることを幸福に思うに違いないのです。

夕暮れ

畜産三年　三宮洋

そこは海だった。グレーを帯びた砂浜に、波が、大きく、小さく打ち寄せる。霞がかかっているのだろう、良く見えないが、向うの崖の切り立つ岩に、波が襲い、しぶきが玉となって散る。砂浜に、二つの足跡が二本の黒い線となって続く、夕暮の生暖かい微風が、海から男の頬を愛撫しながら通り過ぎた。バイオレットを思い出す夕日が、低く、雲から漏れる光の線を、赤紫とピンクを帯び、水平線の彼方から、ダイヤの様に輝く静かな海に刺すように落ちた。砂浜に、男の影が長く尾を引く、浜は赤く染った。男の身体まで染め尽くし、しぶきを赤く反射させ、波は規則正しく打ち寄せる。波の音だけが大きく、淡いピンクに染った泡が、帯状に、陸と海の境を示す如く。松が黒く、バイオレットに染った空に映え、闇から伸びた枝の如く、歩く度に影が後へ動く。

突然、妙な何かが男を襲った。男は、力が抜け、神経がマヒする、急に生命の空しさを感じた。小石を海に投げると、吸い込まれる様に海に消えた。空に点々と星が瞬く、もう六時を過ぎたのか、人気は全くなく、松の生えている所に提が続き、帯の様に光って見える。男の肉体が、波の音と共に泡の如く消えてしまいそうだ。太陽を隠した雲が、一段と映え、それが空にあいた空洞の如く。囲りは増々暗く、闇の中へ溶け込むように、空なしかった。幼い頃、母の胸にすがって思う存分泣いたように、母の胸に抱かれたい、あのやさしい、親切で頼りになる、当っても気持ち良く跳ね返って来るあの胸で、思う存分泣きたい。そんな衝動が彼を動かした。が彼は、あえてそれから逃れたくなかった。何故か、囲りの暗闇が母の胸のようにさえ思えるのだ。彼は現実を厳しく批判した、そして嘲った。光るものが恐しく、明かるくなるのが恐わかった。夜だけでいい、太陽を地球の裏に縛り付けて置きたい。急に涙があふれ出しそうになった。だが、何故か泣けなかった。グッと歯をかみしめた、彼に向って来るものを殴り倒してやりたかった、少々興奮していたのか、「フーツ」と大きく溜め息をつき、舌打ちした。と、何処からともなく、闇が奏でるかのように、リズムが聞える。思い出した様に彼は口ずさんだ、「遠き山に日は落ちて……」、一人でよく歌ったものだった。

既に日は落ち、わずかに水平線が見える位で海の色も囲りの景色も黒い幕に包まれ、波の音だけがあたりを揺さぶっていた。すると、今度は、闇が不安になって来た。やはり彼には明るいものが良かったのだ。小さなビンを無造作にポケットから取り出し、それに軽蔑を与えるかのように、力いっぱい、出来るだけ遠く海の中へ投げ捨てた。我に返ったような足どりで提に上がった彼は　人家の微かな光の方へと、力強く早足に闇の中へと消え去った。波の音は、男を護衛するかの如く、いつまでも響き渡っていた。

幼ない頃の思い出

畜産二年　源田寛

幼ない頃を思い出す事は楽しい。心がさわやかに、何か浄められる様な感じがします。一瞬でも自分が清浄になり、その気持ちで一日を過せるなら、懐古もあながち無駄でなくなります。自分は、その点で得をしています。父が銀行に勤めていた関係上、転勤が多く、〝北海道〟中をかけずり回りました。小樽に始まり函館（函館には始めと終り二回住む事になる）に終る間の思い出は、「浜の真砂はつきるとも、心に思い出の種はつきまじ」といった様なものです。小樽に生まれたが、ここには約二年いただけで、函館に移転しました。函館の町は良く覚えていません。ここも約二年たらずで、根室に移りました。家の近くには幼稚園があり、そこから坂道が一直線に続いていました。坂は子供の目には、急だった様に憶えていますが、その途中にある床屋に姉と一緒に行く時

姉はいつも近所から本を借りて来てくれて、それを共に一心に読みふけったものです。姉は十三才、僕が四才の時だったと思います。又、山川惣治の「少年王者」を、父に催足して読んでもらった事なども忘れられません。一年半位で北見に移りました。家にはブランコがありました。ここで小学校に入学しましたが、始めて小学校に通い始めた頃、帰りに道に迷い、泣いている所をどこかのおばさんに送ってもらった事がありました。〃行きは良い良い、帰りは怖い〃思いをしました。僕のクラスは女の先生で、消しゴムという物を使わせてくれませんでした。一年坊主ですから、字は誤ってばかりで、それを訂正するのに、線を引いて消すという事を先生が教えてくれなかったのか、自分が聞いていなかったのかはっきりしませんが、そういう事は知りませんから、自ずと指に唾をつけてこする事になります。それが何回もこするので紙に穴が開き、こんどはその穴を指でふさがなければなりません。回りの人も、同じ様な事をやっていたんじゃないかと思います。冬になると毎日のようにスキーをつけて、近くの坂へ滑りに行きました。スキーをはいて初めて滑ったという点では、普通の人よりは比較的早いのですが、併し、未だに止める事は出来ますが回転する事は出来ません。その頃は曲がる必要などありませんでした。すなわち、ぶつかりそうになっても、決して自然に逆らわない主義にしていました。小学校二年になってから室蘭に移りました。家の近くには測量山、そして又絶壁を持つ海というこの上ない自然に取り囲まれていた事は幸せです。家にはひょうたん形の池が一つありました。ここに来て始めて二階建の家に住み景色を思う存分堪能する事が出来ました。近くに清水ケ丘高等学校があり、姉はそこへ通学しましたが、姉は英語で父に習ったのと、学校で習ったのでは発音が違うとぼやいていました。〃じゃ学校では先生の発音で、家ではお父さんの発音ですればいいや〃とその時僕が言ったと後で母に聞かされましたが、僕はあいにく覚えていません。小学校（名前は忘れました）へ行って初めての日、緊張していたせいか、おし！いや生理的現象でたまらず教室を飛び出しては見たものの、便所がどこか分りません。気はあせるし、早く済ませたいし、やむを得ず、内庭の隅っこで用を足しました。幸い先生には見つからずに済みほっとしました。此の時分は、内海突破という喜劇俳優がとても人気がありましたが、僕のクラスにも内海という友だちがいて、ニックネームはやはり突破と付けました。小学校三年の途中で札幌へ行きました。札幌は都市計画がうまく出来ていて、町全体が碁盤の目のように区切ら

れています。例えば僕が前に住んでいた場所は、何町かは忘れましたが、南十四条十七丁目と言った事は覚えています。そうとう町はずれでした。家は二階建てで、便所が二つありました。此れは上と下で二家族住めるように成っていた様です。前庭と相当広い庭が後にあり、此には燈籠が立っていました。学校は幌西小学校に通う事になりましたが、此の学校には、必らず胸に名札を附けなければならないという規則があり、大変苦労しました。特に僕達の女の先生は厳しく、ある遠足の時、友達の一人が名札を附けて来るのを忘れると、早速名札を付けに帰してしまいました。付けて来たのを見ると、針金で付けて来たので、先生もさぞかし驚ろいた事でしょう。此のころは、良く近所で駈けっこをしました。しかし自分は一番低学年だったので、いつもびりではありましたが。小学校四年の途中で、北海道の南の函館に再び行く事になりました。と言っても前に来た時は、まだ小さくて良く分りませんでしたから、初めて来たのと変りありません。函館は、函館山の噴火で今まで離れていた小島が一諸になって出来た市です。石川啄木は、此で数々の歌を歌っています。特に、〃東海の小島の磯の白砂に、われ泣きぬれて蟹とたわむる〃は、良く知られています。これは立待岬で読まれた物で、同じく次の様な物も立待岬で読まれました。〃砂山の砂に腹這い初恋の、いたみを遠く思い出ずる日〃。〃大という字を百あまり砂に書き、死ぬことをやめて帰り来れり〃又函館には、五稜郭という旧跡があります。これは幕末、榎本武揚、土方歳蔵等が、箱館戦争で討死した場所として知られていますが、読んで字の如く、五つの角の掘を持っています。オランダ様式の奉行所で、これは無くなりましたが掘は残っており、この掘の整然とした美しさは、ある週刊紙のグラビアに、航空写真で載った事もあります。この掘には良く釣に行きました。鯉、ふな、蟹、海老等がいます。二十センチ位のふなを釣った事もありますが、まあまあの方です。又この掘に御丁寧に服のまま水浴び？した事もありました。現在函館が自分の帰省地となっています。これまで思いつくまま筆を取って見ましたが、これが少しでも皆さんの気持を解きほぐしてくれるなら、これ以上望む事はありません。

愚者のたわごと

畜産二年　はやしかずみ

高等学校の幾何の授業で「鋭角の三等分線はコンパス

と定規だけでは引けない」と習った。私みたいなおっちょこちょいは分度器を使えば、角の三等分線はおろか、四等分線でも、十等分線でも、何等分線でも正確に引けるのに、何故コンパスと定規だけという、規定を作ってしまったのか、とすぐ考えてしまう。

ある数学者は、そのことについて初等幾何ではコンパスと定規だけという約束のもとでの学問であると答えた。つまり二つの規定のもとで展開していく世界ともいえる。

では私たちが、これから研究していく部門ではこの様な規定があるのだろうか。もしあったとしたら現代の科学は、これほどまでに発展していなかったろう。いかなるものを使ってもよいという、制限のない自由な世界で研究できるという権利を私たちは喜ばなくてはいけないと思う。その権利を十分に活用するには、基礎となる多くの知識を得なくてはいけないと思う。他の人については知らないが、少くとも私は、農業について、畜産について知っているとはいえない。無論何でもかんでも知っているとは言えないから、盲人と同じである。若いうちに出来るかぎり何でも知識を忠実に吸収しようと思っている。だが大海の一つな小さな芥と同じ存在いや、それ以下かも知れない。だから、すぐ挫けてしまう。あまりにも海は大きすぎる。また深い海底の様に不明な点があると、興味がでてその方を探ろうとする時もある。これは自分のやる研究ではないと思っていても脇道へと足を進めていく様になる時も、しばしばある。

また知識を吸収しても興味本位だけに終ってしまい、新しいことをやろうとする気持にならない様な気もしないわけでもない。

とにかく失敗を覚悟で、今考えている研究課題をやってみよう。

はじめの考えでは違う事を書くつもりでいたが、だんだん自分の事になってしまった。自分は偏見で我執の強い人間だということを皆様にさらけだしてしまい恥しく思う。

人間性を求めて

畜産三年　苗代信一

六、三、三制の義務教育、高等教育を経て一昨年の春四月希望に胸ふくらませて、大学の門をくぐってからはや二年近く、私はいろいろと新しい経験を重ねては、その都度、大きな勉強をさせていただいたが、そうした自分の歩んできた道程から何度か私は人間性と言うものに対する観念を変えていかねばならなかった。

成長するにともない私と接する身のまわりの人々も次第に多くなり、又その間には、その年代における考え方があったけれども、今社会と学生の姿をながめ、又私自身を顧ては次代を荷負う我等青年として果して今のままでいいだろうか、全ての面でもっと将来に対して責任を感じ自己に対しても冷静にかつ厳しく見開らく目を持たねばならないのではないかと言う大きな疑問にぶつかるのだ。

人間が生活する社会で利点が多くあれば欠点も比例して必ず多くあるのである。例えば資本主義社会に於ては自由競争があって力の強い者は財産権力を持ち、少数にして多数の低級者を無力同様に扱う。これは、古代からの歴史をながめるとよく現われている。一方共産主義社会は国家統制によってあらゆることが計画的に規則的に行われる。一見まったく、すばらしいと思うかも知れないが彼等は仕事に対する愛着を欠き、希望を失わない。そして規定された作業時間が来ればさっさと引き上げるといった、その場限りの人間にならざるを得なくなる。又日本と比較してスエーデン、アメリカの社会福祉機構の良く発達している国々では、失業者が年々増加し、しかも若い青年層に多いと言う統計が発表されていると言う事実は見逃せない。

このような社会問題を社会人、特に青年が人間として正しい思惟と行動を離れ、いたずらに環境をよくしょう、よくさせようと他人を当てにして求める立場を強調したならば、複雑な有機体であるこの世の中は、ますます自己矛盾におちいるであろうことは当然である。

私は昨今、機械力の進化、合理主義の発達につれて、人間性というものが次々に蝕まれていったところで、それについていけるだけの人間精神の開発なくして、真の福祉社会の到来も人類の平和もあり得ないと痛感するのである。

現代の世の中を見れば承知のように人類の運命をかけた原水爆禁止運動すら、二つに分裂し、またイデオロギーを同じくするはずの一政党も内部の派閥争いのもとに、何とか均衡を保っているにすぎない。

私達の身近にも、こうした争いが絶ずあり平和的解決がなされていない。又緊迫した国際情勢下でも世界の最高指導者ともいうべき米ソ両首脳が平和は先ず、お互の心構え、理解と自覚に待つほかないとしか主張できないのは、そこに物質面とか、政治的技術とかではどうにも

ならない状態に追いつめられた現代の矛盾があるからである。

一方我国の国民性としては、島国育ちで他国との往来が極小数であるため、多分に理解を誤りがちである。

例えば外国製品は何でも良いものとし、民族により差別待遇をするなど、甚だしい場合が多い。このような性格は応々に国民の動揺をきたし、又精神を不安定とするものである。

現在と言う時点は、その意見で未曾有の転換期にあるといえよう。この様な社会情勢にあって、我等青年はどの様に対処すべきか、困難な問題である。しかしこの壁を打ち破るのは若人の使命である。それには個々人がしっかりした信念と支柱を築き上げねばならない、不動の精神なくして、成功した例は少ない。

古代から現代の偉人は必ず座右の銘を支柱としてたゆまぬ努力をしてきた。私は多くの友人達（学生、社会人）がただ日々の明け暮れに気を取られ、目標とも言うべく、希望を失ない理想と現実とは一致しないのだからと言った打算的な気持ちでもって、矛盾にも何ら反応することなく、半ばあきらめ気分で生活を送っている事を見るにつけ、反省させられると同時に混乱時代から安泰時代へと移り変った現在、ここに人として、正しい筋道を見つけ人間性を築く方向へと努力したいものである。

私自身、心得としている事項は第一に社会、師、親の恩を忘れないで学業職業に専念すること。第二に気付いた事は順序よく、身軽に直ぐ行うこと。第三に自分に与えられたものに対して腹を立てず不足の思いをしないこと。第四に物、時、心の無駄をなくして昨日より今日、今日より明日へと前向きの姿勢でありたいと、口ずさみながら生活しているのである。

最近、ようやく文部省から義務教育に道徳の時間を設け、実施するにいたりましたが、その反面、青少年の不良化が社会問題となっている現状はいかに人間性と言う最も根本問題を忘れ、ただ目を外にばかり向け、有形的なもののみに、こだわり、内に目を向ける事を怠ってしまっていることは、まったく遺憾なことである。

現在の本学学長、内藤先生は「大学はより高き教養と識見を養い同時に人間形成の場である」と述べられている。

佐藤一斎の語録「言志録」「言志後録」「言志晩録」「言志老至録」の四編を総称して言志四録という。座名に置いて日夕愛誦すべき好箇の語録である。

西郷南洲がこの中から百有一則を抄録して之を金科玉條としたことは余りにも有名な話である。言志四録の中で私の最も好きなのは「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら粛む」の一句である。

若き、我等が確固たる信念と目的を持って日々足下を律していく、そのときにこそ明るく豊かな未来が開けていくことを信じ、そうした大道をひたすら歩むことこそ、将来をめざす人間性であると強く訴えるのである。

テレビと農村子の自由

畜産三年　小野賢二

昨年の夏休みを利用して、東北地方から北海道へ実習を兼ねて旅行をし、農村に於けるテレビの普及は本当にめざましく、歴史に残る一ページであろう。電波に乗り世界各国での色々な事象が迅速に伝達され、便利な世の中になった事は、近代に生きる我々の最大のよろこびとするところだろう。地方の山奥だと云えど、子供達は都会と同様な水準に接近していて、最近の遊びもハイクラスで農村子とは云えない位だ。まだまだ封建的な考え方は完全に姿を消さないにしても、テレビの力は偉大なもので非常に緩和され、近代農業を勉学した我々の意見が、こゝに生きてくるのは当然である。これに関して農村の文化が高まった事も大きく拍車をかけている。都市で学ぶ大学生もかなり地方の人が多く、特に農大では著しい傾向が見られる。都市で勉強して地方に帰り日本の輝しい発展に寄与する事は実に、農大生としての使命は大きい。〝農業栄えれば国が栄える〟これは昔の言葉かもしれないが、根底を流れる精神は何百年何千年と数えても同様であろう。岩手県の山奥にある一農村で意外な事が起きた。それはテレビのない家が数軒あるがこれをどう思うか、又子供に対する影響は、と聞かれた。即答に苦しんだが、この村は金廻りが好いか、又は模倣性が強いかどちらかではないでしょうかと答えた。見たければ子供は何処かで見ると思う。それは子供を良く知って、上に立つ人が指導し、知能を伸ばすべきであり、テレビは子供の家庭の問題だから何も他人が云う事が出来ない。このような不均衡は当然で現実的には解決出来ないと思う。頭の中に社会の青写真を持ち、現実の社会がそれに合わないので、理想的に農村の指導や、また生きる事が出来ないという事では、この世に生存は不可能だろう。そんな気持の小さい事では最高学府を卒業した価値が薄れてしまい、何の為に都会で勉強したか無意味である。

こゝにもテレビが揃っても、収入だとか、子供の人数に

よる教育問題、それに家庭的な問題など、不均衡は沢山ある。兎に角何をしても努力が必要でありこれを惜しめば、どうする事も出来ず、考え方の焦点が少々違っていると思ったものです。それに農村子には都会で見れない自由がある。単に遊びと云う目的の自由に過ぎないが、これは非常に意味がある。自由は、良き意志と良き行動への自由でなくてはならないと思う。都市の子供は幼稚園から、社会の荒波に立ち向い、人生の大レースに於けるスタート・ラインに立つのである。それは人口の増加と科学の発展などによる現象であり必然的なものであると云われゝばそれまでゞあるが、こゝに社会の盾矛が生ずる。これは美しい、清純な気持を持っている子供に傷をつける事になり、良く言われる道徳心に欠けているとか、青少年の非行化だとか、この言葉はこれから生ずるのだろうと考える。或る人は政治が悪いとか、また世の流れだから致し方ないと解決するだろう。しかしその様な段階ではない。他人事ではなく、各人の問題であり、深く反省すべきだ。人間に必要である良識な意志と行動が阻止されゝば、必ず無理が生じ、方向転換がなされる。互に人生の終着駅に到達するのは、同様であるが、問題はその内面的なものである。すべてこの世に誕生すれば平等であり、その上に自分の能力を向上させ、完全に目的を遂行する。それでよいのであり立派な生涯を送ったと讃嘆されるだろう。「現在の資本主義社会では無理だ」と答える人がある。これは自分の理想社会では出来るが現実の日本社会では出来ないというに等しい。この様な消極的な考え方を捨て、一日も早く改善される事を望む次第だ。

農業の変遷と近代化

畜産三年　梅田孝文

最近レジャーを有効に使おうと盛んに言われており、それにより旅行を楽しむ会、登山の会などが多くできてきた、そしてその人達は、山や田園が俗化されてくると、それに対する自然美や、素朴が失なわれると批判するのである、その人達は、都会生活に於て汚いばい煙、車や人々によって悩まされる、だから、長閑な田舎というものに憧れてくるのは、必然的である、しかし、生れた時から田舎の長閑な所に生れて来た人間は、はたしてこの事をどう考えているであろうか、田舎の人間に取っては、あの厳しい冬の雪、そしてそれによる天災などは、どんなに恐しいものかわかるであろう、しかし都会人などはその雪に対して、レジャーを楽しんで喜んでいるが、山間の農家に取っては、農家の生活を脅かす悪魔にしか見えないのではなかろうか、この様に場が変れば人間の立場、能力というものは必ず違ってくるのである。都会人が憧れている自然のよさ、田舎の素朴さというもの、これは超時代的な犠牲、すなわち時代遅れに支えられているのではないであろうか、近年農村の近代化が歌われ、この素朴さは失なわれていくであろう、又田畑が潰され新しい宅地ができるであろう又自然など開発されてゆく、これを見て都会人は、観光会社などを批判するであろう、昔しは、自然的素朴でよかったというがしかしそれはなにも都会人が自然を、愛する様に見えるが、それは都会人の身勝手にすぎないのではないだろうか、極端に言うと時代遅れを望んでいるのである。農村に住む人は、自然をそのままに残して置きたい気持はあるが、しかしそれに衣食住とは換る事はできないのである。日本には昔から土に親しむ農業（自然を相手にする職業）を尊み、そして都会での商人というものを卑しいものと見る考えが昔からあった、実際には江戸時代から士農工商といわれてきたが、商人が農民以上に高い生活をしてきた、大名達は、ただ農民を年貢を取り立てる道具としか考えなかった。ただ生かさず殺さずと言った感じであった。（現在の政府の考えもたぶんにこの事が含まれるであろう）そして他の事を考えさせない様に勉学をさせず、横の連がりを切り農耕に励む事を望んだ、その為に生産の向上とそれに対する勤労を重んじて、そして倹約という事をすごく強調した。これが現在の農村生活の構造の中に含まれている、この苦しい生活に堪えさせる為に商人より上位に置き、土を相手にする仕事は尊いものだといった道徳をつくったのではないだろうか、明治になって都会文化は急激に進歩してきた、しかし農村の文化は全然変化しなかった、昔の農業の方法と昭和の農業の方法は、本質的には変化していない、昔から田畑は小さく区切りそして人間の労働力を主体とした集約農業そのものである、そして都会人はこの時代遅れな事を自然的、素朴といって誉めているのである、だから現在、農民が田舎の素朴と農村の近代化を選ぶ場合、どちらを選択すればよいかとなると、どうしても近代化を受入る事が農村の進む道ではなかろうか、宅地ブームにより地代が上り「土一升金一升」と言われる様に急に農民は金持になる、そしてその金を無駄に使用して、没落していくものもある、それを記事として雑誌記事などが批判する、しかしそれは農民個人の責任であって、農民だけが近代化に、はずされ農民だけが昔からの先祖伝来の土地にいる事の必要

はないと私は思う、現在の農地方も、むづかしくなっているが、これもひとつは、農村近代化を遅らしている原因である、農業は産物を消費する人との間に成立する相互的な経営なのである、稲作中心の零細経営の批判は江戸時代からあった様で、江戸末期の農学者である大蔵永常はイネよりも、園芸作物を奨励し金もうけによる農家の向上を克していた、又明治になって津田仙も同様なねらいから、営農社という学校をつくり「農業雑誌」を発刊したそうである、又この他にも色々な農業に関する事が主張されてきたが、いずれも失敗に終り、今日まで農業形態の改革には至らなかった。日本の食生活が米主体となっている限り、米作中心農業はなくならず、米作中心農業技術の形態の変化は起らないのである。だから日本農業の歴史の第一の革命的発展は鉄器器具の出現によって興ったともいえ、そして第二の革命は食生活の変化、改善が関与してくる、すなわち、西欧なみの食生活である。そうすると米作中心農業の他の「酪農、果樹、園芸」農業が中心となってくるのではなかろうか、私達は昔からの古い農村構造を良く見てそして改善していく事がまず第一の目的であるその為には高い教養と、技術を必要とするのではないでしょうか。

雑記

畜産三年　福田善機

昨年（三十八年）の秋頃、確か収穫祭の頃だったと思うが、「チキン戦争」と言う事を良く耳にした。吾等の学科もこれに幾分便乗して、タレマク等で行進したらしいが成績の如何は……。

その時ふと鶏の飼い方の事を思いだした。元来鶏なんて、明日の事も忘れて野原でギャーギャーしていたものを、火を使う動物がその利点を見つけ出し、それ以来属下において来たものである。それが近年にはえらく発達（？）してしまって戦争まで追っぱじめる事に相成った。それはそうとして昔から鶏頭と言われている位に知能の程度もたかが知れ、その行動範囲もおのずと決まっている、それを利用して飼育するのにコロニーと言われる方法がある、野原に小屋を置いて放し飼いにする方法である。又コロニーと言うのは、植物の方で一つ一つの細胞が一つのかたまりとなって生活する事であるが、各々の細胞は全体としての働きがなく、個々に生きている事とものの本に掲っている、又もう一つ移民という意味もあるらしい。そうすると今の世の親は、東京という野原に頭のでかい鶏を肥畜させている事になる。そしてその奇妙な鶏共が構成している学科の一つが畜産学科と言える。異る点は、吾、鶏は頭の小さい鶏の上にいる事である。それならそうともう少し、まれなコロニーを営む必要があると思うが……？

カンニング是論

畜産三年　Y　F　生

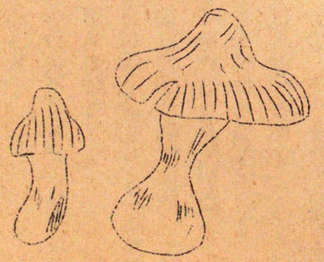
今年の正月はめったに帰った事のない家に帰って過ごした。正月料理も内地とちがって、あれやこれやを盛りたくさんではないが、まあまあである。高度成長と言っても庶民の口の中に入る和の子は二切れか三切れである。家畜の肉は豊富に食べれた。牛、豚、鶏、鹿、白鳥、散弾で落した、しじゅうがらは食べる所がなかった。最初の三つは問題ないとしても、後の二つには問題がある。鹿は解禁で素性の知れた所から入手したのであるから、文句の出る幕ではない。問題は最後の一つである、保護鳥と言うけれど、類の上からいけばカラスの類である。ある人曰く、「丹頂鶴なんて言うのは日本だけの天然記念物である、その点、白鳥は世界の保護鳥？であるからして、格は白鳥の方が上だから、食うにしても白鳥の方が気分が良い」、味も良いが、むやみやたらに気分で殺戮されては白鳥もたまったもんでない。閑話休題、何の肉が一番うまいかと言う事で議論百出、比べようにも独々が今までに一番印象に残っている事を吹くのであるから、どうしようもない。しかしこの話が出て「ある時、さる店の主人が店員を連れて沖に釣りに出掛けた。天気の良い日でもあったので、それぞれ気分を良くして、こぎ出したまで良かったが、櫂を流してしまった。それから四～五日して、うまい具合に救助されたが主人、述懐して、最後には目の前の店員を食べたくなった。結局、何んでも腹が減っている時、食うのが一番うまい、これと同様、人間「貧すると鈍する」で、いよいよとなれば机の中に手が入る。ただ頭から他力本願はもっての他であるが、聴覚視覚等、都合の良いものは、大いに活用すべし。それよりまずそうならぬ様に心掛け、努力するのが、意義あり、必要なんだと思うが？……。

チキン戦争が日本ブロイラーに示す暗示

畜産三年　篠宮　孝

最近「チキン戦争」と云う言葉がしばしば聞かれる様になりましたが、この耳新しい言葉を聞いて畜産を学ぶ諸氏には少なからぬ胸のときめきを感じた事と思います。さてこのチキン戦争とは一体何であろう。その成行きについて少々述べて見よう。アメリカ産ブロイラーがE・C諸国、特に西ドイツへ輸出され始めたのが一九五八年、この頃のアメリカからの輸出量は三二四万ポンドであった。これが僅か五年後の一九六二年には九、三二九万ポンドと三十倍近い激増ぶりである。この為西ドイツの生産者は、安いアメリカ産ブロイラーの攻勢によって息断えだえとなってしまった。そこで生産者は、一斉に起き上って、国家の保護と輸入の抑制を強く要望した。政府はE・E・Cの共通農業政策に基ずいて保護政策をとり経営構造の改善と大規模化を行わせ生産性の向上を図かり、従来の輸入税率の十五%を四十五%に引き上げ、強力に輸入の抑制を行った為、一年間に輸入量は六十六%も激減した。これが深刻な経済戦争となって世に騒がれる所謂「チキン戦争」となったのである。これはブロイラーのみでなく、飼料鶏卵雛種鶏等に於いてもアメリカより大量の輸入を行っている様であって、西ドイツの養鶏家は言って見れば、元から末まで、その一際をアメリカと言うペンキに塗られ様としているのであろう。なぜアメリカから、この様に急激に外国へ進出しようとするのだろう。これはアメリカの農産物の慢性的過剰生産が数年分の小麦、トウモロコシ、マイロ等を倉庫に寝らせていて、その費用だけでも莫大な金額になる事。それからここ十数年前からのアメリカのブロイラー消費の急激な伸びに対してまた綿花の不振に喘ぐ綿作地帯の畜産への転換及びそれらに対する政府の助成等によって多くのブロイラーへの転業がなされた物と思われる。その結果、過剰生産となりそれに対拠すべく、大統領自から、陣頭指揮に立ち、ヨーロッパと云う偉大なる胃袋の手術に取りかかり、その量がしだいに増加するにつれ、輸出も急速に増大して行った。そしてヨーロッパの市場に深く喰い込んで行ったのである。これらの事は、その徹底したアメリカ商法が大きな要因をなしているのではないだろうか。又それがE・E・Cの肘鉄によって日本にその予先を向け様としているのではないだろうか。事実二～三年前より、ボツボツ輸入され始めて昨年あたりから

急激に増加し本年になって激増しつつある。西ドイツのそれを根こそぎ刈取ろうとしたと同様、日本にも、アメリカのブロイラー輸出業者は、最近の所得の急激な上昇と、それにつれて生活水準の向上、食生活の洋風化等により、食肉の需要が急増しつつある事情を見て、我国に於けるブロイラーの消費が、やがて西ドイツなどと同様な、爆発的消費の激増を想定して、日本が将来最も有望な輸出市場と着目したに違い無いと思う。その前哨戦として開催されたのが、昨年九月にU・S貿易センターに於いて、行われたブロイラー、七面鳥、鶏卵の日本市であろう。この時アメリカの優れたブロイラー、ターキー、を皆様に一度食べていただきたいと、試食会まで行われた。そして日本の畜産の中のブロイラーを知らぬ業者の人々及び一般消費者の人々に、あの馨しい、食欲をそそる、ねっとりとした臭のする言葉によって、ひとたまりもなく「アメリカ物は素晴しい」という言葉をもって日本のブロイラーに気付かずに、限り無き味覚と食欲の森に侵入して行くだろう。そしてそれがいつしか当然の如く思われ、ブロイラーとは「アメリカの若鶏の肉」という代名詞となってしまうだろう。これが恐ろしいのである。このアメリカ的商法に日本の生産者はやがて全てを母親に託する、赤子の如くなって行くのだ。その可能性は多分に含まれている。そしてその赤子は脱脂乳によって育てられ、いつしか栄養失調となってしまうのである。



研究室便り

畜産製造学研究室

本学の一隅（北門の附近）に新築された当畜産製造学研究室は昨年度、講師として山中先生を迎え、指導陣も一層厚みを増した。

畜産製造学は、学問上、乳、肉、卵、皮革等に分けられるが、当研究室に於いては細かなグループに分けることなく、室員の和を重んじ、各々が鬼原、山中両先生の熱意ある指導のもとに研究に励んでいる。

現在の場所に移って一年、実験器具、装置等は事欠くことも多いが、乳加工室、肉加工室には乳の処理、肉の加工等に必要な機械も着々と備い、近々運転できるはこびに至った。これにより従来なかった乳肉への親しみが養われ、勉強の実際面への進出もできる様になって来たのである。

当研究室は直接就職につながる関係上、室員も多く現在六十六名、本年度からは専攻制とあって更に増ることだろうが、指導陣をフルに活用し、一層研究室活動に励む積りである。

飼養学研究室

当研究室は昭和三十五年四月、茂原分校時代に設置されたものでその構成は次の通りである。

主任教授　農学博士　海塩義男
講　師　伊藤澄麿
学生室員　三十一名
特別室員

研究活動の目的は言うまでもなく家畜飼養の基礎的、応用的学問の追求であるが、今後の具体的な研究課題としては次の二つに大別することが出来得るだろう。

継続的な研究課題

一、本邦に於ける慣用飼料の飼料的価値。

一、各種家畜に於ける従来の飼養標準の検討

一、各種配合飼料による産卵試験及び乳牛の泌乳試験

比較的断続的な研究課題

一、特殊飼料の調査

一、添加剤の効果

一、微量成分の効果と家畜体内に及ぼす影響。

これらの研究課題を通して週二回のゼミナールでは、原書注解、生化学問題、あるいは室員独自の研究発表など活発な活動が行われている。またその成果は年一回発行される室報「飼養」にまとめられ、関係各方面に配布されるのである。

尚、当研究室の卒業生はＯＢ組織

「干と世会」を結成し、研究室との連絡を密にすると共に各方面、特に飼料界に於いては盛んなる活躍が続けられている。

以上のごとく、海塩、伊藤両先生を中心とする当飼養学研究室は、明るい雰囲気の中にも厳格さと誠実さをもって今後も大いなる成長と発展をめざして日夜研究に余念がない。

（三浦記）

家畜育種学研究室

本研究室は昭和二十四年二月、旧茂原分校（当時千葉農学部）において畜産学研究室の名称で発足、昭和三十四年四月家畜育種繁殖学研究室と改称した。昭和三十六年四月畜産学科の本校移転に伴い家畜育種学研究室並びに家畜繁殖学研究室がそれぞれ独立し、現在に致っている。

本研究室は室長鈴木教授の下に家畜育種学に関する問題を基礎的面並びに応用的面より追求している。特に本研究室の特色として血清学的手法を用い、家畜の血液型、或は抗病性など、いわゆる家畜の血清学的体質に関する研究が進められている点である。しかし昨年四月、本研究室とは別に家畜血清学研究所が設立され、これに関する研究が一層深く進められるようになった。

なお研究室活動として、週一回のゼミナールが行なわれ、主として外国文献の抄読、学生自身が選定したテーマについての討論などがなされる一方、適宜学外から講師を招き、公開ゼミナールが催されている。更に年二回に亘り研究室報を発行し、又主に卒業生によって構成されている特別室員との交流、関係研究機関の見学並びにここでの実習することなどにより、幅広い教養を身につけながら、よりよい学生生活を送るために有意義な研究活動が続けられており、その成果は各方面より高く評価されている。

畜産経営学研究室

春、四月十日過ぎ、校庭の桜も散り果て、幽かに風に舞う色褪た花びらが往時を追懐する頃である。

研究室活動は、先ず親睦会に始まる「行こう」「行きましょう」、多摩川の岸辺に車座になる彼岸が春霞の中に浮んで、真に秀い風情、飲む者、喰う者、唱う者、笑うも、鼻水をすする者、中には飲む事と唱う事を一諸にやって、眼前の人に迷惑を掛ける者も居る、土手の上を黄色のスカートと、水色のスラックスが、不思議な眼を向け通り過ぎて行った、誰かゞ曰く「あの眼ですよ、あの娘

の眼、動物園のチンパンジーを見る眼ですよ」今年も頑張ろうぜ。夏、愈々、調査研究が本格化する。養鶏、養豚、酪農の三班に分れ、茨城、神奈川、福島、埼玉へと相継いで出掛け、部落調査、戸別調査を行う。簿記の普及度の低さからその実態を正しく把握する事は、極めて難しい、だが知る事である、そして問題を探り、これを解決する、大学と村とを結ぶ道、学問と実際との仲介の立場に現在我々は居る。研究室では夜遅く迄、計算機の音と、時折、鉛筆を削る音が忙がしく聞える。秋、車窓より観る山々は、紅葉し美しかった。調査結果を、全国畜産学会、関東支部大会で発表、開催地、山梨県甲府市、冬、学会発表も終り一息入れる間もなく、ある団体からの依頼をうけて、共同育雛所、集団養鶏、協業養鶏経営を調査の為、関西、北陸へと忙しく発って行く。若いエネルギーは、定められた調査のみに満足していない。失なわれつゝある農村の情緒、貧困、そこに唱われる生活の歌の数々を、貪欲な迄に頬張って帰って来る。そして議論、論争が始まる。新らしい農村建設の芽は、此に無意識の内に生れ、育っているのだ。来年もまた、麗らかな春の日、多摩川の岸辺に賑かな宴が見られる事であろう。

（中里記）

助　手　石島芳郎
学生室員　二十二名
研究員　二　名
合計二十七名

家畜繁殖学研究室

当研究室はまだ浅く完全なる実験器具もないのですが、除々に不備な点が解決されて来た様で、我々室員一同張切って研究しています。

当研究室の構成は次の通り

室　長　農学博士　平林　忠　教授
助教授　農学博士　一戸健司

研究室の活動は平林教授による「家鶏」と、一戸助教授による「家兎」の二グループに分れて研究している。論文テーマは「喉嚢現象」、「性周期」、「家兎に於ける人工妊娠」、「雌雄性」、「鶏の人工授精」「孵化現象の探究」、「雛の機械鑑別」などを研究対象としている。また研究員二名も新らしい技術テーマを提供していたゞき、活発に動いています。

ゼミナールは週一回月曜日に実施、室員の研究発表を中心に教授や研究員と共に、質疑応答を行う。出席は全室員で日夜研究に余念がない。又当研究室は人間形成に重点をおき、大学生としての知識と教養を身に付け立派な卒業生を送り出している事は、我々の誇りとするところです。

（小野記）

獣医学研究室
（家畜診療所）

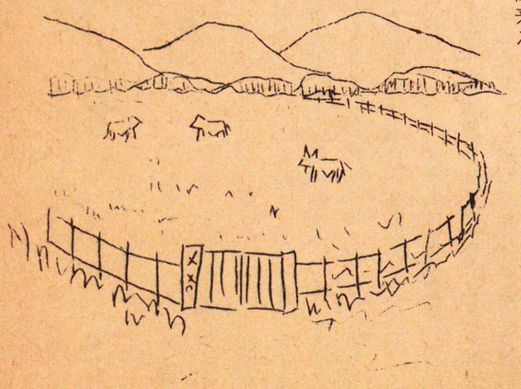
本研究室は平山助教助を室長に近江助手（獣医師）そして二十有余名の室員を有している。

今年からコース別になり、本研究室は、繁殖学コースになるが別にそれに拘わらない。獣医学は範囲が広く、繁殖、育種、製造、飼養等のものも学ばなければならない。研究内容は家畜の診療、防疫衛生、繁殖及び解剖等を行い、又各種薬物の畜体に於ける影響や効果をも試験し、繁殖、育種、製造、飼養等と有機的に結びついた研究が行われている。

なお家畜診療所も出来て満一年になり、診療活動も活発で、X線等により精密検査が行われている（小家畜）。

大家畜は、厚木農場に於いて行い、又近隣農家の家畜の診療、人工授精、飼養管理等の指導を行っている。

研究室では、毎週ゼミナール、実験発表会、座談会等を開いて充実したものにしている。本研究室では、各学年に門戸を開き、総ての室員が研究に身を入れることが出来る。



鶏胚の発育過程における
体液蛋白分層の変化に関する研究

昭和三十七年度優秀卒論賞

中村輝夫
杉浦嘉明

初生雛の腹腔内未吸収卵黄の吸収メカニズムを明らかにすることは、虚弱体雛、或いは成長の不揃い、更に孵化中における死籠卵等の発生の原因を解明する一つの手がかりとなりうるものと考えられる。

これに関しては、これまで血清学的、解剖学的、物理化学的に若干研究されている。

著者らは、鶏卵胚の発生過程における各種体液蛋白分層の変化を明らかにするために、鶏胚胎児の血球と血漿及び羊水について研究した。まず鶏胚胎児血球は抗一鶏血球免疫血清を用いて抗原抗体反応、凝集反応により種属特異性抗原の消長について、鶏胚胎児血漿及び羊水は濾紙電気泳動法と抗原抗体反応の沈降反応で抗—Al、抗—Glo、抗—Vitellin、抗—Vitellenin抗—P・L・P、抗—雄鶏血清に対する各蛋白分層の消長について追求した。

実験材料

鶏胚胎児血漿及び血球は孵卵七日令より二十一日令迄の各日令、また羊水では孵卵七日令より十八・五日令においてそれぞれ採取して本実験に用いた。

採取方法としては、鶏胚胎児血漿は、特別に作った毛細ガラス管を鶏胚胎児の心臓に挿入して採血し、その一端をガスバーナーで封じ、遠沈分離（1500/sec、5分間）をして、血漿と血球を分離使用した。鶏胚胎児羊水は、注射筒で採取した。

抗血清：抗原として卵白よりAl、Gloを、卵黄よりL-Vitelin、L-Vitellenin、P・L・Pを精製分離し、又雄鶏清と鶏血球を採取して、各々抗血清を作整し、吸着精製することにより特異的抗体を作整した。

漏紙電気泳動：ベロナール緩衝液を用い（pHは八・六、μ＝0.05）、濾紙は東洋濾紙No.五一Aの陰極

面より七・五cmの処に一・七cm巾にSampleを02cc spotし、0.5mA/cmの定電流で泳動時間を四時間として泳動した。泳動したものはAmidoschwarz/OBで染色し、ダイアグラムを作製した。

実験成績

一、電気泳動による成績

(1)鶏胚胎児血漿は孵卵七—二十一日まで泳動し、易動度、相対比、A/G比について追求した。

◎鶏胚胎児血漿蛋白は孵卵七日令からAmidoschwarz/OBで染色される蛋白が認められ、陽極に移動する蛋白のみであった。孵卵七日令では二峰、九—十三日令では三峰、十五日—二十一日令までは三～五峰に分かれた。

◎易動度は第一分層では孵卵九日令より認められ、孵卵中期では雄血清の第一分層に近い値を表わすが後期では大きな値を示すようになる。第二分層では、孵卵十五日令より認められ、孵化期間中大きな変動はなく、雄鶏血清の第二分層よりも大きな値を示した。

第三分層と第四分層は、孵卵十三日令までは雄鶏血清の第三分層と第四分層の中間の易動度を示し、似かよっており、孵卵十五日令からその易動度の差が大きくなり、第三分層は孵卵後期において雄鶏血清の第三分層より値が大きくなり、逆に第四分層では雄鶏血清の第四分層より値が小となった。

第五分層では、最も個体差が少なく、大体一定した値で一般に雄鶏血清の第五分層の値よりも小さい。

◎相対比では、第一分層では孵卵十三日令まで増加して、以後増減が著しかったが、大体緩慢な増加を示し、雄鶏血清の第一分層の値よりもやや大となった。

第二分層では孵卵十五日令より孵卵二十一日令まで減少していく傾向があり、雄鶏血清の第二分層に近い値となる。第三分層も孵卵二十一日令まで減少していく傾向があり、雄鶏血清の第三分層の値に近くなる

第四分層では、孵卵七日令より減少して、孵卵十八日令以降は雄鶏血清の第四分層より小さい値を示すが、孵卵十九日令を最低として孵卵二十一日令では雄鶏血清の第四分層に近い値を示す。

第五分層では、孵卵七日令より十一日令までは雄鶏血清の第五分層に近い値を示していたが、孵卵十五日あるいは十八日令を最低とした曲線を描き、孵卵二十一日令では雄鶏血清の第五分層に近い値になる。

鶏胚胎児血漿蛋白の相対比は、孵卵二十一日令にはいずれも雄鶏血清蛋白の相対比に値を示すようになる。

A/G比は孵卵十三日令で雄鶏血清と同じA/G比を示し、以後、孵卵二十一日令まで緩慢に増加して、雄鶏血清のA/G比よりも、やや値が大となる傾向がある。

(2)鶏胚胎児羊水蛋白では、孵卵七日より、十八・五日令まで泳動して、易動度、相対比、A/G比について追求した。

◎鶏胚胎児羊水蛋白の泳動像は、孵卵九日令ではAmidoschwarz/OBで染色される蛋白が認められず、孵卵十一日令より十七日令までは陽極に移動する三峰のみで陰極に移動する一峰は認められなかった。

◎発生過程における個体差があり、孵卵十三日令から十七日令まで陰極に移動する分層が認められない個体があった。

◎易動度については、雄鶏血清の易動度と比較すると、第一分層は雄鶏血清の第一分層に相当する。第二分層は孵卵十三日令までは雄鶏血清の第四分層に相当するが、孵卵十五日令では雄鶏血清の第四分層と第五分層との中間か、やや第五分層に近くなり、孵卵十七日令以降は易動度が大きくなり、雄鶏血清の第三分層に近い値となる。

第三分層は、孵卵十一日令より十五日令までと十八日令は雄鶏血清の第五分層に相当するが、孵卵十七日令と十八・五日令では雄鶏血清の第四分層に近くなる。陰極に移動する分層は孵卵十五ー十七日令で易動度が最大となり、曲線を示す。

第二分層、第三分層、陰極へ移動する分層は、孵卵十五ー十七日令でいずれも易動度が大となっている。

◎相対比については

第一分層では孵卵十一日令より十八・五日令まで僅かに増加するが、ほとんど変化しなかった。

第二分層では孵卵十五日令で最大となり、それ以後は減少する。第三分層は、第二分層と逆に孵卵十五日令で最低となり以後増加した。陰極に移動する分層は十三日令が最大であった。

◎A/G比については増加する傾向がある。

二、血清学的反応による成績

鶏胚胎児血漿並びに羊水に含まれる成分の変動を血清学的に抗ー E.W.Albumin 血清、抗ー E-W.

Globulin 血清、抗ー L-Vitellin 血清、抗ー L.Vitellenin 血清、抗ー P.L.P 血清並びに抗ー雄鶏血清に対する反応より追求した所、次の様であった。

(1)鶏卵成分

A、鶏胚胎児血漿

①各抗血清に対する鶏胚胎児血漿は概ね、大きな双曲線を示した。

②抗ー E.W.Globulin 血清に対する血漿の反応は、抗ー E.W.Albumin 血清に対する反応に比べてかなり緩慢な曲線を示した。この点、E.W.Albumin とE.W.Globulinとの吸収過程は異なるものと思われる。

③抗ー E.W.Albumin 血清に対する血漿の反応は抗ー雄鶏血清に対する反応によく類似していた。

④抗ー L.Vitellin血清、抗ー L.Vitellenin 血清、抗ー P.L.P血清に対する反応は抗ー E.W.Albumin 血清に対する反応と全く異なり、比較的類似した緩やかな上昇曲線を示した。

⑤各抗血清に対する反応からVitellin、Vitellenin、P.L.Pの吸収過程は異なるものと考えられる。

⑥全般的に十九・五日令のtiterは十九日及び二十日令のそれより低い値を示した。この原因は明らかでないが鶏胚の発育の不揃いに起因するものと思われる。

B、鶏胚胎児羊水

①羊水中の抗ー E.W.Albumin 血清に対する成分は他の成分と異なり、七日令には極めて高い値を示したが、十八・五日令に至る迄減少した。E.W.Albumin とE.W.Globulinの羊水中における濃度の変動には大きな違いがある。又、血漿中のE.W.Albumin の濃度の変化は抗ー雄鶏血清に対する成分の変化によく似ていたが、羊水はこれとも異なった変動を示した。

②卵白成分であるE.W.AlbuminとE.W.Globulinは七日令にすでにその存在が認められたが、卵黄成分である、Vitellin、Vitellenin、P.L.Pは九日令迄その存在が認められなかった。又十一日令から十八・五日令までこれらの卵黄成分の変動はよく類似していた。

2. 鶏胚胎児血液の種属特異性について

鶏胚胎児血液の種属特異性抗原の発育状態を明らかにする為に、抗雄鶏血清免疫家兎血清及び抗雄鶏

血球免疫家兎血清に対する鶏胚胎児血漿及び血球の反応より追求したところ次の様であった。

①雄鶏血清に対して五千百二十倍の titer を示す抗血清に対し十三～十五日令の鶏胚胎児血漿は平均千二百八十倍の titer を示した。その後直線的な上昇を示し、二十一日令に於ては約七億～十三億倍の titer を示した。

②雄鶏血救に対して四百～八百倍の titer を示す抗一雄鶏血球免疫家兎血清に対して九日～二十一日令の鶏胚胎児血球は概ね千六百倍の titer を示し、日令による変動はなかった。尚、全孵化期間を通じて成鶏血球の四百～八百倍の titer より高い値を示した。

③鶏胚胎児血漿の種属特異性抗原の発育状態と血球のそれとは異なっている。

石垣は濾紙電気泳動法により鶏胚胎児血清及び羊水の蛋白分屑の消長を追求し、血清蛋白分屑泳動像は孵卵中は三峰、孵化時には五峰に分離でき、又羊水蛋白分屑泳動像は陽極に移動すると三峰と、陰極に移動する一峰に分離できるとしている。本実験の濾紙電気泳動法による成績では、鶏胚胎児血漿蛋白分屑泳動像は七日令で二峰、九～十三日令迄は三峰、十五～二十一日令迄三～五峰に分離し羊水蛋白分屑泳動像は十一～十七日令迄は陽極に移動する三峰と陰極に移動する一峰にわかれ、十八日、十八・五日令では陽極に移動する三峰のみであった。

Marshall は電気泳動的に発生初期の鶏胚胎児血清には易動度の大なるものが増加するとしているが本実験においては血漿の易動度が最大である第一分屑は孵卵七日令では存在しなかったが、孵卵九日令で認められそれより十五日令にかけて増加し、十三日令以降緩慢な増加を示し、むしろ孵卵後期に易動度の大なるものが増加するものと考えられる。又羊水蛋白分屑泳動像も第一分屑は孵卵日数が進むに従って増加する傾向があった。

◎ Hamilton は孵卵、五、十三、十九日令のものは変異が極大値を示すとしているが、本実験成績で個体差の特に大きかったのは濾紙電気泳動法における七、十五、十七、二十、二十・五、二十一日令であり、血清学的反応では七、九、十一、十三、十七、十八、十八・五日令であった。

◎野並は破殻直前にリポ蛋白質が増加を示すとしているが、本実験では孵卵十九日令で抗—L-Vitellenin、抗— L-Vitellenin、抗— P.L.P のみならず抗— Albumin、抗—Globulin、抗—雄鶏血清に対する titer ともに急激に増加している。このことは十七～十九日令は、尿、漿膜呼吸が肺呼吸に変化するなど破殻孵化の準備が完成されるときであるからだと考えられる。又十九・五令で Albumin を除く全成分が減少することは破殻の為のエネルギーを肝臓にでも蓄積するためであるとも考えられる。一方、十九～十九・五日令で卵黄嚢が腹腔内に没入する時期であることから、その為のエネルギー源となるとも考えられる。

◎ Rupe は卵黄は孵化過程の初期から胚及び膜組織の形成に利用されるもので孵卵十七日令迄の間に卵黄の四十三%が吸収され孵卵十一日令までに胚、膜組織の形成に必要とされる物質は大部分卵黄から供給されるとしているが、十一日令の羊水の反応で卵黄成分の α-Vitellin、α-Vitellenin、P.L.P、が反応を示すようになる日令であり、羊水中の卵黄成分も胚及び膜組織形成に必要とされる卵黄と何らかの関係があるものと考えられる。又卵白は主として胚に対する蛋白質給源として用いられるもののようで、十一日令迄はほとんど吸収されず胚の発育が急激となる十一～十七日令の間に卵白の八十六%が消費されるとしているが、本実験の鶏胚胎児血漿は血清学的反応で Albumin は孵卵十五日より、Globulin は十七日令より急源に上昇線を示し、関係あるものと考えられる。

◎野並によると卵黄において孵卵十四日令迄は新鮮卵と大差ないが、十四日令以後の羊水、尿膜液を主体とする部分は固形物中十六～二十五%のエーテル抽出物を含むとしているが、本実験では十一日令にすでに羊水中に卵黄成分が含まれていることが明らかにされた。

◎ Burnet は孵卵十三～十四日令で卵白の一部は羊膜腔の中に入り羊水と混合するとしている。このことから本実験の濾紙電気泳動法による鶏胚胎児羊水の成績は、十一日令で十例中二例にのみ Amidos chwarz/OB に染色される蛋白が、認められることから、孵卵、十一日令を境として卵白の一部が羊膜腔の中に入り羊水と混合するものと考えられる。

摘要

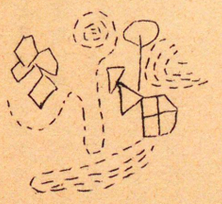
(1) 血漿

○濾紙電気泳動像から、七日令で二峰、九～十三日令で三峰、十五～二十一令で三～五峰の蛋白分屑が分離できた。

○孵卵後期に易動度の大なるものが増加を示した。
○血清学的は各抗血清に対する鶏胚胎児血漿は大きな双曲線を示した。
○E.W.Albumin と E.W.Globulin の吸収過程は異なるものと考えられる。
○抗ー E.W.Albumin 血清に対する反応は抗ー雄鶏血清の反応に類似していた。
○抗ー L.Vitellin 血清、抗ー L.Vitellenin 血清、抗ー P.L.P血清に対する反応は比較的類似した上昇曲線を示した。
○十九・五日令の titer が全般的に低い値であることは鶏胚の不揃、尿漿膜呼吸から肺呼吸の転換等、破殻準備である卵黄嚢の没入の為のエネルギー源に起因するものとする。

(2) 羊水
○濾紙電気泳動法では十一～十七日令は陽極に移動する三峰と陰極に移動する一峰、十八、十八・五令では陽極に移動する三峰にのみ羊水蛋白分屑を分離できた。

（家畜育種学研究室・室報より）



畜友会便り

三十八年十一月二十二日の畜友会総会により新役員は次の通り決定致しました。

書記　橋本三郎（三年）

顧問　平林忠（科長）
　　鈴木正三（主事）

役員
委員長　杉本健之（三年）
副委員長　田中収（三年）
　　加藤政彦（二年）
会計　苗代信一（三年）
会計補佐　佐藤信哉（四年）
書記　小野賢二（三年）
　　鼻崎敬貴（二年）
企画　河合永忠（三年）
　　藤井丈哉（二年）
渉外　篠宮孝（三年）
クラス委員　中村孝（二年）
　　幡生徹太郎（四年）
　　佐川輝男（四年）
　　梅田孝文（三年）
　　渡辺嘉彦（三年）
　　橋本敬次（二年）
　　奥村定弘（二年）
監査委員　栗原良雄（四年）

名誉会員　西川哲三郎先生
　　相馬清策先生
　　伊藤雄吉先生

＊本年で畜友会も四年目を迎える訳けだが発足当時の積立金も年々少なくなり我々もここで会費の値上と卒業生からの会費制の問題、その他二年前よりの獣医畜産連盟加入の問題などで臨時総会を一月二十二日に計画しましたが後期試験が早くなり、時期的な問題で実行できませんでした。

＊一月三十一日懇談会「卒業生を囲んで」が行なわれた、これは今まで卒業生を送る会として行なわれていたが卒業してからも特別会員である先輩方の学生時代の体験や今後の豊富などを、後輩と共に話し会う目的で行なわれた。

昭和三十九年度事業計画

一月　懇談会（卒業生を囲んで）記念品贈呈
二月　畜友会便り発行
四月　ふじみの発行
　　新入生オリエンテーション
五月　在校生名簿作成
　　新入生歓迎会
　　畜友会便り発行
六月　見学旅行
　　講演会
　　畜友会便り発行
九月　映画会
　　畜友会便り発行
十月　講演会
　　収獲祭
　　畜友会便り発行
十一月　定期総会

全日本獣医畜産学生連盟について

獣畜連については、多少知識があると思いますが、この連盟も創立三年を迎えるわけだが、この間、畜友会が本連盟に加盟しなかった理由としては学内の組織の強化と獣医と畜産の勢力的な問題と我々役員自体がこの会をよく理解することができなかったことにある。しかし今や畜友会の活動も一定の枠の中に入り、そこには必然的に畜友会だけでは解決できない問題が起きてくる獣医と畜産の勢力的な問題にしろ我々だけで考えても解決できる問題では無いと思う、全国の獣医、畜産学科の学生が一体となって話し合い正確な認識を持つことが望ましい。そのような訳けで我々も今が加盟に一番良い時期ではないかと確信するしだいであるが、会員諸君も十分理解していただいた上で、結論を出したいと思う。

畜友会委員長　杉本健之

獣畜連趣旨説明

〃本連盟は純然たる学術団体である〃

（根本理念）

今、我々は近代資本主義のもとに存在し、その一分野たる獣医畜産学を学び将来獣医畜産界に於いて生活を営まんとする者である。

我々は現存する社会の歴史的な動きに沿い将来の利益を守らなければならない。

我々は斯かる認識をもって獣医畜産界の発展を推進し社会の発展に努めなければならないことは言うまでもない。

我々の獣医畜産の分野に於いて惹起される諸現矛盾が一般社会に於ける諸問題と側面的にも相互依存している事であり、不可欠の緊急性を有し大きい世界の動きと関連している事を改めて認識し偏見を取り除くべきである。

我々の活動が四年ないし二年の学生時代に於ける活動に終るのみでなく、この活動が卒業後に於いても、延長されるべく恒久的綱領のもとに努力を続けなければならない。

以上の如く獣医畜産学に旨を同じくする我々は手に手を取って合い固い絆で結ばれ獣医畜産界の主体性をより一層強固なものとして確立しなければならない。この事は一般社会に対して連鎖反応を起さしめる原動力となり人類社会の発展に貢献するのみでなく将来の生活を守る重大な意義と複使命を有するものである。即ち現実の社

会が、分化しその連合体として形成されていればその各分野が主体性を確立し相互に連絡しているものである。

又現存国内に於いても職能別団体というべきものが組織されている。例をあげるならば医学連薬学連が存在して活発なる運動を既に展開している。我々が主体性を確立し強固なる団結が組織の上になされるならば我々の内面に連盟が存在し、我々の内に起る現象矛盾を自らの手で解決する事が可能であろう。

我々の矛盾が一般社会の矛盾として強く国民感心を呼ぶように訴えて世論を換起し遂には勝利を得るであろう。その為に現実の社会、特に農村を観察し深く根を下して行かなければならない。然して恒久平和を念願とする人類の発展に益々貢献せんとするものである。

〔本連盟の必要性〕

今や我々の周囲には幾多の問題が存在し、その分析の必要をせまられているものが多くある。

次に掲げる諸問題はただ一大学に於いて分析研究されるべきでなく全国的な組織に依ってあらゆる角度から検討されなければならない。我々は分析し態度を決めたならば全国の獣医畜産学生に知らせる義務を有し、他の組織へ能動的に働きかけるべきである。同学に志す者が一堂になんらかの形で会し益々学習意欲を旺盛ならしめ勉学条件の改善も併せて行う必要がある。

一、日本農業の分析にあるその前途は如何。

二、貿易の自由化と我国の農業（畜産）

三、獣医学生の修業生限の問題

四、技術増進のための実習開拓問題

五、関係諸団体の実態把握

六、卒業後の生活問題の調査

七、関係社会人の地位向上問題

◎獣医畜産界の発展

この旗印のもとに組織し強固なる団結をもって活動を展開するものである。

〔活動方針〕

一、学術の向上と学生々活の発展向上

(1)学術文化の交流

a、情宣紙パンフレットその他印刷物の発行

b、加盟団体の開催する各種学術文化会交流討論会

(2)獣医畜産関係の諸問題に対する国内外情勢分析及び

(3)学術研究発表会の開催

(4)勉学環境条件の改善

(5)学生の厚生問題

(6)単位団体の開催する学術文化事業の共催支援

(7)その他必要とする諸事業の開催

二、関係諸国団体との交流

(1)獣医畜産関係諸団体との交流

a、同団体との定期的懇談会の開催

b、印刷物を通じての交流

c、技術習得のための実習場の斡旋指導

(2)医学連、薬学連との交流

(3)関係国際学生団体との交通

三、獣医畜産関係者の社会的地位並びに待遇の向上

(1)関係者の実態の把握

(2)向上方策の検討

(3)向上活動の展開

〔会　員〕

本連盟の会員は、獣医学科畜産学科の学生に限る、尚加盟方法は規約第六条により学部及び学科単位の団体とし加盟しその構成員となる、会員は会費として年額百円を納入するものとする又会員はすべて次の特典をうける。

㈠情宣紙パンフレットその他の刊行物に寄稿しかつその優先領布を受けること

㈡研修会講演会見学会その他の会合に出席し、また研究発表を行なうこと

㈢本連盟で蒐集した参考調査研究資料を閲覧する

㈣その他本連盟の全事業に参画すること

東京農業大学畜産学科
〃畜友会〃規定

第一章　総　則

第一条　本会は東京農業大学畜友会と称する。

第二条　本会は東京農業大学在学生、教職員および卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。

第三条　本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章　会　員

第四条　本会の会員は左記の三種をもって組織する。

一、正会員　　二、特別会員　　三、名誉会員

正会員は東京農業大学畜産学科在校生、特別会員は東京農業大学畜産科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。

第五条　会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を

失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章　役員及び機関

第六条　本会は左記の役員をおく。

一、委員長一名　副委員長二名　書記二名　会計一名　会計補佐一名　渉外二名　企画二名　クラス委員八名

二、監査員四名

第七条　本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。

第八条　委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画は正会員の中より総会において計十一名選出する。

委員は各学年二名、監査委員は各学年一名づつ選出し、欠員が生じた場合、速やかに補充しなければならない。

第九条　役員の任期は原則として一年とする。

第十条　総会は正会員により構成され、本会の最高決議機関とする。

第十一条　継会は正会員の三分の一以上により成立する。

第十二条　定期総会は、年一回十一月に召集する。

臨時総会は、左記に該当した場合前一カ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員の三分の二以上が必要と認めたとき。

第十三条　総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条　総会に於ける議長は、総会においてその都度互選する。

必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条　総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条　総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章　業　務

第十七条　第六条一項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、この招集は委員長が行なう。

第十八条　本会の事業年度は十二月一日より翌年十一月末日迄とする。但し会計年度は十一月一

日より翌年十月末日までとする。

第十九条　本会は左記の業務を行なう。
一、会員親睦会
二、講習会及び研究発表会
三、見学調査
四、機関紙の発行
五、その他第二条に附帯する業務

第五章　会　計

第二十条　会費は年間五百円とする。その納入は四ケ年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。
但し転入者は転入年次より正規の手続きを経て一括納入する。

第二十一条　本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条　納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条　決算報告は十月末日までに作成し公示する。
承認は定期総会において行なう。

第六章　監　査

第二十四条　本会の業務を円滑、正常化する為、監査委員をおく。

第二十五条　監査委員は、前条の目的達成の為年度末に会計監査をおこなう。監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条　監査委員は第六条一項の役員の兼任は出来ない。

第七章　附　則

第二十七条　本会規定解釈の疑義は委員会において、最終的解釈する。

第二十八条　本会規定の改正及び追加は総会においておこなう。

第二十九条　本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

昭和三十八年度卒業論文一覧表

氏名	論文題目	担任教授	備考
荒井　敢太	赤色野鶏と家鶏との血清学的並びに電気泳動的関係	鈴木	
浅見　国昭	赤色野鶏についての形態学的観察	〃	
柿倉　正徳	鶏内のX線照射に関する研究（脂肪及びビタミンに及ぼす影響）	鬼原	
角谷　健一	共同育雛場の採算性と配布価格の決定基準	砂川	
神原　義長	種鶏の繁殖に及ぼすフラゾリトンの作用に関する研究	一戸	
神尾　信一	山羊の新血球抗原の分類並びにその血清学的性状	鈴木	
印牧美佐生	山地酪農の飼料構造の比較有利性について	砂川	
片渕　正巳	鶏の屠殺前処理が筋肉の貯蔵性に及ぼす影響	鬼原	
加藤　昇	香辛料の脂肪に対する抗酸化作用について	〃	
勝田　尚考	クリシンの過剰投与の幼雛に及ぼす影響（市販飼料のアミノ酸）	海塩	
片山　洋	種肉栄養雑種（卵白交換）による鶏雛の発育に及ぼす影響について	鈴木 田中	
木田　英宣	酪農経営に於ける資本の限界効率について	砂川	
北崎　真次	ミヤリ酸等添加による雄雛についてシベレリン及びミヤリ酸等添加による雄雛の発育に	平山	
許田　正高	カルシュウム低給与に於ける用鶏血清中の蛋白質及びカルシュウムについて	〃	
泉　昱夫	牛の血清に関する研究	鈴木	
泉　政徳	乳酸菌の発育促進物質に関する研究	鬼原	
笠原　季成	チーズの熟成に関する研究	〃	
飯塚壮太郎	肉生産に於ける鶏の養分量の研究	海塩	
井上　忠直	養豚に於ける多頭飼育と協業経営の比較経済性について	砂川	
伊沢　宏爾	複合多羽養鶏に於ける主幹作目との比較有利性について	砂川	
石川　養征	山羊血清の血清学的並びに電気泳動	鈴木	
本間　焦	鶏卵卵白の泡立性に関する研究	鬼原	
林　満	ウィンナー・ソーセージに関する研究	鬼原	
広田　憲三	フィリッピンの畜産	平林	
平賀　宣勝	鶏の肉生産に要する養分量の研究	〃	
原田　喬	鶏の肉生産に要する養分量の研究	海塩	
江原　真弓	鶏の肉生産に要する養分量の研究	海塩	

氏名	論文題目	担任教授	備考
小暮　勇二	ついて 雛鶏に於けるフレフバー添加の影響（特に体重産卵率に関する研究）	鬼原	
小清水征雄	市販ソーセージの品質に関する研究（特に含有細菌について）	〃	
熊本　三成	代替労働費が飼養規模別収益に及ぼす現象について	砂川	
蔵谷　健治	山羊の血清学的並びに電気泳動的症状	鈴木	
紀林　約行			
松原　彰	乳酸菌の保存に関する研究	鬼原	
松谷　輝雄	鶏肉のX線処理に関する研究	〃	
宮崎　晃	冷凍、冷蔵保存及び加熱処理が鶏肉蛋白の消化性に及ぼす影響	〃	
茂木　克彦	鶏肉のX線照射処理に関する研究（蛋白質に及ぼす影響）	〃	
中岡　伸一	ソーセージの保存に関する研究	〃	
中田　雅典	仔豚の白痢症対策について	平山	
中里憲司郎	寒冷地養鶏経営の経済性について	砂川	
西原　弘人	Ferliliged egg Transplantation in the female	平林 一戸	

氏名	論文題目	担任教授	備考
野上　征利	rablits and studres on the reproductine physielogy in the femele rablils. 鶏特に肉用種に於ける発育の解析並びに選抜時の決定に関する研究	鈴木	
小川公衛夫	コクシジウム症に対する治療予防試験	平山	
小川　豊明	養鶏経営に於ける資本の限界効率	砂川	
岡　弘			
岡本　普行	豚肉における風味成分に関する研究	鬼原	
翁長　久光	ミヤリ酸添加による雄雛の発育についてジベレリン及びミヤリ酸添加による雄雛の発育について	平山	
小野　竹一	Thiaxime の強化飼料と馬の血液中の Thiaxime の動行について	海塩	
大橋　昭男			
大野　正喜	Chlorella の飼料価値	海塩	
太田　信行	家鶏の精液に於ける稀釈液の研究（グルタミン酸ナトリウムによる稀釈効果）	一戸	
斉藤俊太郎	ミヤリ酸を主剤とする飼料添加剤スターM給与による物	平山	

氏名	論文題目	担任教授	備考
坂田　勝	豚の肉生産と飼料に関する調査	海塩	
桜井　健二	乳酸菌による牛乳蛋白及び脂肪の分解に関する研究	鬼原	
佐々木　靖	山地放牧協業酪農の経済性について	砂川	
紫田　修壱	鶏糞乾燥剤「ドライクリーン」の利用について	平山	
島　哲夫	鶏卵飲料に関する研究	鬼原	
篠宮　栄	ブロイラーの生産規模別収益力について	砂川	
菅谷　幾夫	山羊による消化試験（野乾草オーチャードグラス・イタリアグラスと濃飼料《配合》の養分量について試験する）	海塩	
高橋　捷也	栄養剤（スターM）補給がアンゴラ兎の仔兎生産に及ぼす影響について	平山	
高橋輝千代	馬の皮膚温度に関する研究	〃	
武井　孝能	乾燥剤デシコーンの乾草調製への利用とその毒性試験	〃	
田向　敏男	燐酸塩類の肉類に及ぼす影響	鬼原	
田中　彬文	鶏肉に関する研究（風味と組成について）	〃	
富秋　昌英	乳業用乳酸菌の芳香生産性に関する研究	〃	

氏名	論文題目	担任教授	備考
若林　治	寒高冷地養鶏経営の経済性について（寒高冷地調査地区養鶏経営と東京近郊に於ける養鶏経営と経営学的比較研究）	砂川	
鰐石　征記	家鶏の人工受精に於ける適正希釈液の探究に関する研究	一戸	
渡辺　忠	妊馬血清製剤によるラッテ過排卵誘起に関する研究	平林	
山口　広俊	キストラン鉄投与とヘマトリットヘモグロビン及び血清鉄との関係について	海塩	
柳瀬　昿一	卵黄の乳化力に関する研究	鬼原	
安井　鉄郎	牛乳及び乳製品に於ける放射性同位元素の分布	〃	
結縄　殖明	牛乳山羊乳及び人乳の蛋白質に関する研究	〃	
中田　文樹	代替労働費が飼養規模別収益に及ぼす現象について	海塩	
森井　正考	Thiamins の強化飼料と馬の血液中 Thiamins の動向について	〃	
西田　興二	肉生産に於ける鶏の養分量の研究	〃	
本多　真一	グリシン過剰投与の幼雛に及ぼす影響（市販飼料のアミノ酸定量）	〃	
原田　博之			

氏名	論文題目	担任教授	備考
糸井　正文	我国に於ける種雄中の精液性状に関する調査（特に有雛的考察）	鈴木	
清藤　俊昭	冷凍鶏肉に関する研究	鬼原	
小岩　信雄	乳牛に於ける消化試験について鶏に於けるグリットの作用について	海塩	
小森　昭人	鶏の肉生産に要する養分量の研究	〃	
森本　松彦	燐酸塩類の肉類に及ぼす影響鯨マグロ鮫鶏肉内部への燐	鬼原	
長倉　秀男	ホルモン投与による鳩の就単誘起に関する研究	一戸	
多田　尚二	燕麦の粗繊維の消化率とC・M・C（Caloxy Methyl cellulose）投与による消化率の関係について	海塩	
庄司　清和	食肉処理加工時に於ける衛生管理が品質及び保存性に及ぼす影響	鬼原	
中村　治衛	乳牛に於ける消化試験について	海塩	
遠藤　昇	翼切断による三元雑種（ネッグホーン）雄雛の肥育性について	鈴木 田中	

編集後記

◎後期試験終了後の編集
某講師新婚ホヤホヤの為に試験の採点甘いの情報に編集員諸君大喜び。
結果は
ガチョン「不可」！
甘い甘い夢物語。
現実は厳しかつたよ

◎特長イカスネ！
編集員諸君、菜種油と何んとかは搾れば搾るほど出るの法則（？）通り大いにハッスル。

◎今日は校正の日
A曰く、彼女とデートの日とつぶやく。
デートDATEとはダテなり。
Aはダテ男か！？・・・・

男の嫉妬は見苦しいぞと誰か叫ぶ。
叫ぶ男こそ本当に嫉妬した男だ！

◎いよいよ完成
嬉しいね全くついに出来あがりか！
あいつヒゲ伸ばして何んだい、天下の農大の恥だと笑う男。
その顔面は雪男也。

◎とにもかくにも難産でしたよ。



昭和三十九年四月十三日　印刷
昭和三十九年四月二十五日　発行

ふじみの　第四号

編集責任者　田中　収
発行者　杉本　健之
発行所　東京農業大学畜友会
東京都世田谷区世田谷四の四六一
TEL（四二一）五一七五（呼）

印刷所　株式会社　東神堂

躍進するフジタの畜産薬！

トキンプラズモン®10
遂に出た
トキソプラズマ症の薬！

鶏コクシジウム症に
サルファ剤の内服薬を！
トリコクシ®L

トンキー®注
仔豚を
鉄分の貧血から守ろう！

販売元　フジモト薬品株式会社　東京都中野区道玄町2
製造元　藤田製薬株式会社　東京都品川区上大崎2－566

常に一歩前進する田村の獣医薬品

肝機能検査試薬
肝テスター「田村」

野外でも操作が簡単である
短時間に反応が正しく判定出来る　（特許出願中）

重症・難症の乳房炎に
カナマスチン「田村」
カナマイシン主剤10mℓ
明治製菓と技術提携
（文献供試品進呈）

製造発売元　**田村製薬株式会社**
東京都千代田区神田駿河台3の5（三五ビル5階）
TEL　(201) 1106・1107・1108
出張所　中国・四国・九州